軍たること五十年、これを大御所樣時代といふに、何ぞその響の悠揚たるやされどその晩年に至りては內外の風雲漸く穩かならず、水野越前守擧げられて樞機を握り、英斷以て天保の改革を行ひしが、その察々の明を以て瑣末事にも干涉し、敢て假借することなかりし爲に、忽ち四民の反感を招き、功半ばならずして退くに至れり。この頃より外國關係著しく複雜を加へ、嘉永中米艦江戶の近海に來り浮ぶに及び、人心恟々、やがて攘夷論及び尊王論の沸騰となり、內憂外患並び起り、鼎の沸くが如き世相の裡に王政維新を迎ふ。されば、この時代の下半期は學問文藝などの榮ゆべき時代にあらざりしが、その上半期すなはち文化文政時代の盛況は前の元祿時代にも劣らず、人或はこれを以て德川氏十五代を通じての黃金時代となすも、その理なきにあらず。

寬政政治の長短

定信は好學の士なりき、渠が信州岩村の城主松平氏より起して林家を繼がしめし衡は同家の中興述齋その人にして、これより林家の昌平坂學問所を幕府の有とし、柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里等をして、述齋を扶けて幕士及び諸藩の子弟を敎授せしめ、また多紀氏の躋壽館を擴張して醫學館となし、塙保巳一の爲に和學講談所を設けて、群書類從の編纂に從事せしむ、その他諸國社寺の寶物を調査して、谷文晁をして畫筆を採つて集古十種をなさしめしめなどす。かくて定信はひとり學藝の保護者たりしのみならず、みづから文學者たるに耻ぢざるの才あり、致仕の後は樂翁と號して、文筆に親しみ、殊に和文をよくし、花月草紙等の著あり。以上は定信の美點を數へたるなり、されど定信もまた消極的壓抑主義を以て治世の綱領とせる德川氏の執政者なり、當時漢學には朱子學の外に陽明學あり、堀川の古學あり、菽園の古文辭學についで更に折衷學派も出で來て、互にその勢力を爭ひしが、定信はかれらが黨同伐異、爲に正邪の論囂々たるを嫌ひ、無謀にも朱子學を奉ずるものにあらざるよりは、幕府に仕ふるを得ざらしむることとす、所謂異學の禁とはこれなり。この制度は諸藩の學徒をして朱子學に向ふことよく、水の低きに就くが如くならしめ、一見學界の弊風を掃蕩したりしかの觀あれども、由來學問の道は寧ろ辯難攻擊によつて發達すべきもの、この禁令一たび出でゝその進步は忽ち一頓挫を來せり、見よ、當代の學徒は何れも學問の第一義たる事理の闡明を忘れて、字義の末節に拘

泥し、訓詁の業に維れ日も足らず、或は酒食の媒として詩文に淫するもの、滔々として風をなす。蓋し訓詁考證は清朝の學風にして、その影響は早晩免るゝを得ざる運命にありしならんが、幕府年來の方針に應じて、新奇の說を排せんとする定信によりて間接の幇助を得、その勢頓に盛なるに至れり。これより才あるものは愈、韜晦して野に隱れ、名利を逐うて幕府に阿附するものはひとり世に時めく。

出版の制裁

されど幕府が社會の自由を束縛せる事實は著述出版に關する方面に於て一層顯著なり。天明寬政の交、田沼意知が殿中に刃傷せられしこと、松平定信の政治に關することなどを小說に託して書けるものありしかば、幕府その罪を問ふ。出版取締の法これより嚴を加へ、寬政三年山東京傳は洒落本を作りて罰せられ、翌四年林子平內外の形勢を論述して、その藩仙臺に蟄居を命ぜられ、その後數年喜多川歌麿はその描くところの錦繪が風俗を壞亂する恐ありとて刑に遇ひ、岡田玉山の繪本太閤記もまた絕版を命ぜらる。天保改革後には、幕士大野權之丞靑標紙、殿居囊を編し、政務に關することを公にしたりとて罪に問はれ、爲永春水は人情本を著はして風俗を亂せりといふ理由を以て、また槍玉に揚げらる。その外寺門靜軒は江戸繁昌記によりて奇禍を買ひ、柳亭種彥また田舍源氏によりて咎を被らんとして僅かに免かる。幕府がかく著作出版の自由を束縛したるは、蓋し人心の惑亂を防ぎ、風敎を維持せんとせるものにして、その動機においては間然するところなしといへども、行爲はいさゝか苛酷に過ぎたる嫌なしとせず。されば寬政に山東京傳が罰せられし後は、出づるとして出づる小說は幕府の消極方針に妥協するを以て策の得たるものとすれば、その最善の標識は常に敎訓の二字に存せざるを得ず、勸善懲惡主義こゝに確立して、全般に就て評すれば小說はやゝその位置を高うし、極めて下俗なるものは跡を絕ちたるも、變化の妙はすなはち失はれたり。

知識の向上

然しながら小說が一般に地位を高くし、從つて文學上の階級の相違が減じたるを以て、强ちに文藝を迫害せる幕府の法令に基くとするは、皮相の見たるを免れず、卽ちそれよりも大いなる原因は一般國民の知識が向上せる爲とすべし、蓋しこの時代の上半期は江戸時代を通じて最も平和なる時代にして、慶長

元和以後、學問開けてより既に二百年、圖書の弘通したることもまた元祿時代の比にあらず、國民教育の長足の進歩をなせること、更めて說明するを要せざるなり、かくては小說家も所謂戲作のみを以て甘んずる能はざるに至るは當然の事にして、その所作はやう〳〵卑俗の境を脫して高尙の域に進めるものといふべし。ひとり小說がその眞價を高めんとせるのみにあらず、かれらはまた進んで別に隨筆類を公にして歷史的考證を以て名を文壇に馳せんとせり、京傳の骨董集、馬琴の玄同放言等卽ちこれなり。橘守部、黑川春村の如きは、はじめは狂歌師たりしが、これも後には國學者として立つに至れり。北川眞顏は赤良の門人なりしが、後にはまたその狂歌を俳諧歌と稱へて敎訓的意義を寓するを主とするに至る。おほよそ此の如きは當時の平民文學の趨勢にして、かれらの意中寔に憐むべしといへども、その作はかへつて平凡に流れ、眞顏の如きは遂にその道の貞德ともならず芭蕉ともならずして、狂歌は早くも發達の一路を斷たれ、俳句も天明を過ぎては全く見るに足らざるに至り、之に反して和歌更に勃興して新たに社會の大勢力となる、國民の趣味が如何に向上せしか、

和歌の勃興

これを推すに難からずといふべし。

香川景樹

江戸の歌壇に名ありしは加藤千蔭及び村田春海の二人なり、二人共に眞淵に從ひて學び、しかも古典の研究は深からず、また深からんことをも求めずして、專ら花鳥風月を友として、文學者たるを以てその務とす。而してその和歌は眞淵に學ぶといへども、師が晩年の萬葉調は佶屈贅牙に過ぎたりとして、これを避け、むしろその中年に於ける流麗の歌風に倣はんことを庶幾せるものの如し。當時この二人を師として學ぶもの世間に甚だ多く、偉大なる眞淵が斯道鼓吹の功は、その國學方面の感化と相俟ちて如何に大なるかを想はしむ。しかり眞淵の功は極めて大なり、然れどもこの時に當りて別に京に香川景樹の起るありて天下を風靡せるを見ては、ひとり眞淵のみの功を稱へんは當らず、寧ろ文學に對する一般世人の着眼點が著しく高きに向へるの結果といふを正しとせん。

香川景樹は鳥取の人、はやく京に出でて、德大寺家に仕へ、和歌に潛心して遂に一家をなす、その國學者としての主張は眞淵と全く相反し、眞淵の新學に對し

て新學異見を著はし、また眞淵が萬葉集を以て歌道の模範と仰げるに對して、古今集を以て斯道の典型となし、平安朝のいにしへ、漢文學盛に行はれてわが國の歌道漸く頽廢せんとするの時、ひとり漢詩の前に屈伏せざりしのみならず、古今の秀歌を撰して天下後世に示せる貫之の德を頌し、古今集正義を作ると共に、また別に土佐日記創見をも著はして、貫之の詞藻を永く文學史上に錄せんとせり。さらば景樹は古今集と貫之とを以て歌道の神髓を發揮したるものとして、ひたすらこれに準據し、他に轉向することを拒みたるか、否、景樹は古今の風體を汲めど、强ちにこれに拘泥せず、專ら自己性情の誠をづくして、虛飾なく細工なく、あるがまゝなる感情を直下に吐露せんことを期せり、今左に景樹が歌論の大概を窺はしめよ。

景樹以爲らく、眞淵が古學と稱するものは、畢竟和歌の極意を以て修辭の技巧に盡きたりとするものにして、これ豈に謬妄の見にあらざらんや、平明直截なる今日の慣用語を卑俗として賤しみ捨てゝ、ひとすぢにむづかしげなる古辭廢語に興を遣らんとするは偏固の主張たるを免れじ、和歌とは此の如きもの

景樹の歌論

なるべからず、和歌に重んずべきはその言葉よりも寧ろ調にあり、調とはたゞ巧に古語雅言を連ぬるといふが如き淺はかなるものにあらずして、人心の祕奥より湧き出づる悲喜の情の、知らず識らず口に出で辭となりて、おのづから曲節を具するものすなはち是なり、これは天地に根ざして、古今を貫き、四海にわたりて、異類を統ぶるものなり、言語は世々に移り、年々に流れ、且、貴賤と隔り、都鄙と違ひて定則なし、さるを後人詞につきて調をいふは、本末を取りたがへたるものにて、大よそ違はざること少きは宜ならずや。」（以上歌學提要の說なり、この書は景樹の門人内山眞弓の手に成りて、師說を輯錄せるもの故、こゝに引けり。）

を借りて思想の發表につとむべく、强ひて今の人の胸底に響かぬ古今萬葉の古辭を摸擬するは、大なる僻事にして、却つて天眞の流露を妨ぐべし。歌は感應の聲にして、歌ひ上ぐると同時に感ずる程のものならざるべからず、探り尋ねて漸く主意を知るが如きものは歌にあらず、この點に於て歌は他の伎藝と異なり、「おのが心の趣くに任せたれば、法もなく、式もなく、況んや古歌によらんとすれば古き俤立ち、師の風を學ばんとすれば忽ち似せものとなり、詞をとれば

小盗と誹られ、意を奪へばなほ罪重く、調を掠むれば強盗とさげしめらる、また文辭を專にすれば巧におちて造花の如きを免れず、徒言（クゴト）にては人感せず、感せざれば歌といふの甲斐なく、更にせんすべなきやうのものなり、されば才藝の達人も博學の識者も難しとする業なりかし。されども名利の念を去り、たゞ性情の誠を栞として分け入らむには、おのづから進み易きこと、却りて磯城島の道に如くものなかるべし」（歌學提要）と。此の如くにして桂園一派の歌風は樹立し、當時關西の歌壇を風靡したるはいふまでもなく、明治に及びてなほ廣く世に行はる。

宣長の小說論

景樹の歌學の起れる頃、眼を轉ずれば古代小說に對して大膽なる評論を發表せる本居宣長あり、その評論にいへらく、源氏物語を以て、儒佛の道を示さんが爲に作れりなどいふは、牽强附會の甚しきものといふべし、作家はたゞ物のあはれを寫さんとて筆を執れり、されば讀者もまた物のあはれを感せんが爲に讀めば足る、これを外にして何の目的かあらんと。景樹と宣長と二人が說くところ何ぞそれ相似たるや、これらの說は江戸時代にありては、洵に空谷の跫音にして、これを明治評論の先驅と稱するも妨げず。然らばこれらの說に勵まされたる江戸盛運期の文學は各種の方面に於てこれらの評論を辱しめざる發達をなし得たるかといふに、遺憾ながら然りと答ふるを得ず。宣長は文學の決して宗教道德その他の觀念によりて拘束せらるべきものにあらざるを說けり、景樹もまた作家その人の天眞の性情を發露すべしと論じたり、すなはち文學はこれら二三の先覺者によりてやうやく純美主義の上に立たんとする傾向あるに至りたれど、多くの作家は二百年來の迷夢いまだ覺めやらずして、階級主義、保守主義乃至道德主義の鴆毒に惱み、小說にまれ、和歌にまれ、實際に於てこれ等の批評に伴ふ反響は極めて少かりき。例へば景樹の歌はその和歌に對する識見の高邁と共に頗る見るべきものあり、批評と創作と相俟つて當時文壇の第一流として推すべく、その門下にもまたやゝ賞すべきもの乏しからざりしと雖も、この尊敬すべき子弟の作歌も、實は舊來の習慣に繫縛せられざるもの少きこと、眞淵の一流と五十步百步の間にあり。尙ほ泝つて思ふに、桂園一派の主張はこれより先き小澤蘆庵が言ひ且つ試みたるところにして、この

事は特に一言注意し置くの要あり。

讀本の流行

小説の方面に於てこの時代を代表するものは讀本なり、元來讀本は繪本及び草雙紙が挿繪を主とするに反し、旨と文章を讀ませんとするよりこの名は起れり。廣義に解すれば假名草紙、浮世草紙の類もこの分類中に入るべく、既に讀本の稱は、八文字屋本のみづから稱ふるところなりしが、今日いふところの讀本は、通常、狹義に於て用ひられ、英草紙に端を發して、漢文學の影響極めて深く、專ら勸懲主義を標榜して、寛政頃より盛に行はれ來れる半紙形の小説をば稱するなり。これが作家の棟梁は曲亭馬琴なることいふまでもなけれど、馬琴に先だちて山東京傳あり。

山東京傳

山東京傳は江戸の町人なり、若き頃より狹斜の巷に出入して、頗るその事情に精通す、固よりその學問は博しとにもあらねど、超凡の趣味を有して詞藻また豐富、畫技にかけても天稟の才あり、初めは錦繪を作り、また青本の挿畫を描くこと多かりしが、青本作家としての譽世に喧傳するに至つて、專ら著作に身を委ねたり。京傳がはやくも戀川春町、朋誠堂喜三二、芝全交等の諸先輩と肩を並べて文壇に角逐せるは漸くその三十歳前後の時にして、更に洒落本に指を染むるや群少作家爲に顏色なかりき。寛政二年幕府が猥雜なる書籍の出版を禁じたるにも拘はらず、書肆蔦屋重三郎の勸め默しがたくして洒落本を作りたる廉によりて、その翌年手鎖五十日に處せらる。京傳もと小心翼々たるもの、深くこれに懲りて二三年が程は筆を絶ち、僅かに馬琴をして二三の青本を代作せしめたるのみ。その後再び敎訓的青本の述作に從事せしが、當年文壇を驚かしゝ自在の筆致、滑稽の趣致は殆ど影を潛めて興味索然たるもの多し。蓋しこの間は京傳が兀々として商業にいそしみ、蓄財に忙はしき時にして、著作は寧ろ第二位に置かれたるなるべし。のち數年更に心機一轉讀本を出す、言ふまでもなく時勢の變移に應じて、この轉化を試みたるなり。しかもこの頃より馬琴の名漸く顯はれて京傳と肩を竝べ、京傳に老大家としての手腕あれば、馬琴に新進の意氣あり、かれ一書、これ一書、二者の競爭端なくもこゝに始まりて、互に相下らず、屢、相似たる材料をさへ捕へ來りて、伎倆の優劣を世に問はんとす、また一代の奇觀なり。

京傳の讀本

京傳の作を見るに行文甚だ平易流暢にして、篇中の人物も馬琴の作に普通なる道義的觀念の權化の如きもの稀なり。これ京傳が今日、動もすれば馬琴以上に評價せられんとする所以なるべしと雖も、概していふに京傳の讀本は到底馬琴の敵にあらず、京傳の長所は滑稽を主とし、寫實を旨とせる青本、洒落本等の短篇にこそあれ、讀本の如き長篇に至りては結構の才に乏しき渠の能くする所にあらず、いつしか馬琴に凌駕せらるゝに至れるもの、固よりその所といふべし。元來京傳は遲筆の方なるに、意志また强固ならず、これを馬琴が精力に任せて數千言立ちどころに下り、年々數種の讀本を出して平然たりしに比ぶるに、同日の比にあらず。ひとり作物の量に於て然るのみならず、讀本の作者として京傳は本質的に馬琴に一歩を讓る所あり、蓋し渠は人情風俗の觀察乃至描寫に於てこそ一種非凡の才ありて、よく微妙の趣致を得たれ、その想像力に至りては寧ろ貧弱の評を免れず、加ふるに組織的才能さへおぼつかなければ、結構に重きを置くべき讀本の作者として極めて不利の位置に立たざるべからず、此に於てか强ひて從來行はれたる脚本の類を粉本として、彼此斷片的に補綴し、辛うじて篇を成すも、固より變化なく統一なく、陳腐散漫、讀者は屢〻欠を挿みて倦怠の聲を放つに至る。この弱點は渠が作中にありて最も有名なる昔語稻妻表紙に於てすらこれを認むべく、その續篇たる本朝醉菩提に至つては更に著しく、絶筆の雙蝶記の如きは、馬琴が衒學的なるを厭ひて平俗の上にも平俗を期したるはさることながら、支離滅裂の弊はこゝに至りてその極度に達したりといふべし。

曲亭馬琴

今や江戸時代小說界の泰斗曲亭馬琴を說くべき時は到れり。馬琴は江戸の人、その家は士分とこそいへ、渡用人といふ地位低き家柄にして、資產とても豐かならず、職業の選定に迷ひて、幾度か方向を轉じたる後、京傳にすがりて寛政二年始めてその述作を公にす、時に年二十四。これより漸く作家として自信を得るに至りたれど、名聲は添ひ來らず、その隆々として文壇に喧傳せらるゝに至りしは、三十六歲京坂地方を漫遊せる後にして、爾來盛に讀本を著はし、京傳の名も蔽はるゝに至れり。馬琴の小說は長篇なるもの殊に多く、かの青本の變形たる合卷に浩瀚なるものを出すに至りしも、渠を以て嚆矢となす。蓋し馬琴は

性來の達筆なるに加へて、心身强健、不撓不屈の精神を以て著作に對すれば、成さんと欲して成らざることなく、不幸晩年に及びて過勞の爲に明を失ひしが、なほ先だちしわが子の嫁に口授筆記せしめて、未だ曾て身の安逸を思はず、遂に八十二の壽盡くる時、二百種に餘れる著作を殘せり。

馬琴の讀本

馬琴が京傳よりも優れたる特異の點は、主としてその結構の才にあるべし、而して二家が各、讀破してその藥籠中に收めし和漢の古書は量に於てこそ多少の差はあれ、性質に於て相似たるものなるべきに、これを活用する結果に於て著しき相違を生じたるは、一にこれを咀嚼し消化する力の不同に歸せずんばあらず。京傳は短篇にありても屢、その脚色の絲を混雜せしむれど、馬琴は好みて長篇を作りながら、條理井然、前後の照應歷々として掌を指すが如く、しかも渠の如く多作し、渠の如く速成して、未だ曾て京傳の如き類似重複に陷るなく、變化縱橫なるを得たる大手腕に至りては、敬服の外なしといふべし。げに馬琴は博覽多識、眼を古今の典籍に曝して一日も倦まず、從つてその小說にはこれら讀書の影響著しきものある中に、支那小說の感化はわけて顯著なるものあり、殊に忠義水滸傳の如き、演義三國志の如き、西遊記の如き、金瓶梅の如き、水滸後傳の如き、三遂平妖傳の如き、快心篇の如き、また隨筆にて五雜俎の如きは、絕えず馬琴が材料の供給を仰ぎたるものらし。げに萬卷の書を讀みて、識見また遙かに時流を拔きしは馬琴の自ら深く誇とする所にして、その生涯を通じていはゆる戲作者の間に伍しながら、ひとり傲慢不遜儕輩を眼下に視たるも故なきにあらずといふべし。されば幕府が禁令を發して小說に箝束を加へたる際の如きも泰然たるもの乃公一人のみと自負し、勸懲主義を振り翳して筆硯益、壯なりし得意の狀、想見するに堪へたり。

勸懲小說

小說に於けるいはゆる勸懲主義は、馬琴に至りてその最高調に達したり、而してひとり馬琴といはず、すべてこの主義を標榜する小說には、嘗て血あり肉ある眞の人間を見ず、出づるとして出づる主人公は何れも忠孝仁義などの美德の觀念を具象せる傀儡子にして、その一擧手一投足と雖もみな窮屈なる道義によりて左右せられ、かりそめにも普通の人間に有りがちなる自己本位の行動、感情本位の生活に陷らざらんことを寤寐希うて止まざる人物のみなり。作

者はこれらの人物に向つて滿腔の同情を瀝ぐと共に、これに對照せしめんが爲に、これはまた罪惡そのものの權化なるが如き人物を點出し來るは、その常用手段なり。此の如くにして意志の生活を重んじて感情の發露を無みせんとしたるが故に、若き男女相會するも木石相對するが如き觀あり、笑ふべきの至ならずや。固より當時の作家もその作に變化を求めんとせざりしにはあらざるも、その變化は事實の表面にのみありて、心理は殆ど一定不變なれば、篇中の人物何れも善玉惡玉ときまり切りて沒趣味を極めたり。

文體の尙古

當時、讀本の外に廣く民間に喜ばれたるものを合卷とす、合卷は專ら滑稽を主とする靑本が一歩進んで眞面目なる續物語となれるものにして、この變化は讀本の刺戟によれり。その體裁は一枚毎に挿繪ありて、主として女子供に喜ばれたるが、專ら平易を旨とせるその內容は、これを讀本に比するに相似て更に劣れり。余輩をしていま馬琴を中心とし、合卷、讀本を一括する當時一般小說界の傾向を評せしめんか、余は先づ作家等が力めてその作を高尙にし、士君子の覽にも供せんとして、その結果おのづから形式に於ける一種の尙古主義の弊に陷れるを言はざるべからず。その故らに七五の古調を散文の上に弄して甚しく自由を妨げられたるは、西鶴が破格の文章に比して正に兩極端にあるものといふべし。用語の如きも穿鑿に穿鑿を重ね、和漢の古典を涉獵して、その中より撰擇すれば、綺爛の趣はあり、印象の明瞭はすなはち缺きたり。

歷史小說

尙古主義は題材の方面にも及んで歷史小說を出せり。當時、文學の中心はいふまでもなく江戸にして、江戸の地たる武士の花と仰がるゝところなれば、その文學は武士を寫さずんば人氣を博せず、如ふるに作物を高尙にせんがためには、筆を社會の上流に立てる武士に向くるを得策とすれば、この勢は愈、助長せられ、しかも武士を寫さんとしてかれらはその眼を中世の歷史に向けたり。これ一つには德川幕府が江戸時代の事實を寫すことを嚴に取締りたるにもよれど、また一つには現在と相隔つる時代の霧の縹渺として高遠の趣あるを喜べるなるべく、殊に馬琴の如きは源平盛衰記、吾妻鏡、太平記、鎌倉大雙紙等を材料として、好みて源平時代以降戰國に至るまでの史實を脚色したり。人或は言はん、馬琴の小說もその題目によりて見れば、明かにまた世の流行を追ひて元

禄以後の戯曲脚本に基きし作も多きにあらずやと。然り馬琴もまたお夏清十郎を寫したり、お染久松を寫したり、三勝半七を寫したり、お俊傳兵衛を寫したり、されど一たび渠の筆に上りては、これらの人物も、もはや多情淫靡の人物にあらずして、節操松の如き忠臣なり貞女なり、その愛情も決して放恣なる情念に根ざせるものにあらずして宿世の因縁によりて相結ばれたるものとし、若しくは別に避けんとして避くべからざる義理あるによるものとなす、卽ち一例を擧ぐれば松染情史に於けるお染久松は南朝の遺孤にして普通小説に見るが如き痴話關係のものにあらざるなり。

當代の人生觀

さらば避けんとして避くべからざる義理または宿世の因縁とは如何なることを指すか。家系尊重、個人沒却といへる離るべからざる二つの思想が江戸時代を通じて人心を支配したるは、すでに説きたり、これらの思想と當時一般に信ぜられたる因果説とは小説の上に於て當然相結ばるべき因縁あり、此に於てか作中の人物は何れも特立獨行すべき一身にあらず、自己と稱するも祖先より子孫に傳へて悠久なる時代の一區分をなすに過ぎずして、その一々の行動は祖先に對して重大なる責任を有すると共に、子孫に對してもまた深重なる關係ありとす。若しそれ異性に對する戀情の如きも決して偶發せるものにあらずして、數十百千年の昔なる相思の男女が輪廻し來りて、その未だ果たすことを得ざりし戀を遂ぐるものとす。善人の禍に遇ふも過去の咎、すべて人間一身の現在の禍福はまのあたりなる自己の行爲の結果によるよりも、世を變へ時を隔てゝ附き纏へる祖先以來の應報にして、才も移すべきにあらず、德も避くべきにあらず、たゞ手を拱いて無始以前より未來永劫に連る運命の飜弄に任せつゝ、一上一下、その生涯を浮沈するものとなす。おほよそ此の如きは當時の作家に通有なる人生觀にして、その由來するところ支那小説の影響もこれありと雖も、主として家族主義に伴ふ系統の尊重と佛家の因果説との抱合によりて生まれたるは疑ふべくもあらず。

偏固なる倫理觀

系統を尊ぶ世には、特に女子よりも男子が勢力あること、言ふまでもなきことにして、女子は單に家督相續者を擧げんがための機械の如く思惟せらる。妻に子なければ、男子は妾を蓄ふるも、當然の處置として非難せらるゝことなし。さ

れど未婚の男女が恋に相愛する如きは、意志の節制なき破廉恥の行爲とし、男女はたゞ夫婦たり許嫁たる場合に於て、始めてその愛情を交はすことを得。されば小説中の佳人才子が思慕の情はすべて親と親とが結べる緣あるがために許されたるものにして、夫婦の愛情も發するところは親子の關係にあり、卽ち愛と孝とは一物にして二物にあらず。げに忠と孝とは當時の小説に苟くも缺くべからざる要素にして、當時の小説殊に馬琴の如きは何事もこれにより て律せんとすれば、作者は恰も作中の人物に對して裁判官なるが如き觀あり、固より勸懲といひ、教訓といふも、一概に文藝の上より排斥すべき所以なし、然のみならず、活眼を開いて廣く人生を望めば、紛々擾々として法則なく拘束なきが如き間にも、おのづから動かすべからざる造化の妙配劑あり、從うて作者が隱密の間に道德的批判を挿むもまた妨げず、時にはこれによりて愈、その作を價値あらしむる場合なきにあらずと雖も、故らに自己の褊狹なる倫理觀によりて作り上げたる典型的人物を標準として、一般社會に臨み、しかも具體的にその倫理觀を示さず、却つて屢、空漠なる抽象的批評を挾みて篇中の人物を

一九と三馬

論議するは、思はざるの甚きものといふべし。わけても馬琴等が懷抱せる倫理觀は極めて獨斷的にして、その理想的性格を具備せる忠孝兩全の士として示せるものも、頑冥固陋、極めて沒常識にして、いはゆる融通のきかぬ人物のみ多し、且つ篇中の人物彼も此もおしなべて同一性質を帶ぶるは著しくその作の價値を底下せしむ。

京傳、馬琴と同時代の人に十返舍一九及び式亭三馬あり、同じく小説家とはいへ、主として滑稽本といへる一類のものを作れり。滑稽本はもと洒落本より出でたるものにして、洒落本が風俗壞亂の誹ありしを以て、これは專ら罪もなき社會の瑣末なる事象を描きて、無邪氣なる笑を取らしめんとせるもの、また當時の太平を反映すべき一種の文學なり。一九が作にては東海道中膝栗毛最も著はる、これは彌次郎兵衞及び喜多八といへる二人の剽輕なる江戸つ子が、暫し窮屈なる社會の拘束を脫し、是非善惡の批評を離れて、面白をかしく無禮講的なる幾十日の旅行に浮世の外なる生活を現出せることを寫せるものにして、その誇張せる滑稽は讀者をして手を拍ち腹を抱へて大笑せしむるもの比

比然り。三馬の傑作は浮世風呂と浮世床となり、共に滑稽本の上乘なるものとして、膝栗毛と併稱せらるゝものなるが、膝栗毛とこの二書とはその觀察取材の點に於て著しき相違あり、前者は現社會を寫すといふも、描かれたるものは、これを離れたる別天地の觀あるに、後者はあくまで世相に卽して、人間通有の弱點に對する皮肉なる諷刺を試みたり。されば同じく滑稽といふも、彼にありては、有り得べしとも思はれざるほど常識を外れたること多く、此にありては苦笑禁じがたき事柄多し。さはいへ三馬の描寫も一部少數の社會に於ける觀察にして、それも多くは身振や言葉など表面の生活に現はれたるをかしみを捕へてこれを誇張するのみにして、人間心理の奥底に立ち入りて、これが解剖を企てんとせるものにはあらず。要するに一九といひ、三馬といひ、その小說はやはり現代を謳歌せる太平逸民的の產物といふを當れりとす。而してかゝる思想は强ち幕府の消極的方針に迎合せんとの用意に出づるものとも言ひ難く、むしろ當時江戸市民の一般心理が知らず識らず一九、三馬によつて代表せられたるものと見るべし。たゞ作家が當時の社會に對して辛辣なる批判を下さんか、政府者の鐵槌は直ちに作家の頭に下るべきが故に、稀に深酷なる傾向を有するものも深く裏んで語らず、一代の著作を擧つて愈、鼓腹擊壤主義の典型中に陷らしむるに至れるなり。

種彦と春水

一九、三馬と並びて柳亭種彦は合卷に名を得たり、その有名なる偐紫田舍源氏は源氏物語を飜案して時代を室町に取り、かの純情小說を移して、武士道主義の勸懲小說に化したるもの、種彦の名これより一層高かりしが、不幸にして忌諱に觸れて、三十八篇を以て中止せざるを得ざるに至る。されど文學者としての種彦の位置は到底京傳、馬琴と同列に在るを得ず、一九、三馬に比べてもなほ下れり、恐らく種彦がしかく喧傳せられたるは、合卷の內容よりも、挿畫の意匠に長じたるが爲なるべし。斯くて余は既に江戸盛運期に於ける四人の主なる小說家に就きて敍したるが、また序に爲永春水の名を錄すべし。春水は人情本の作家なり、人情本も同じくもとは洒落本より分れたるものにして、これは主として男女の情事を描くを目的とす。春水自ら狂訓亭と號して、訓蒙を標榜すと雖も、實は猥雜なる辭句を弄して、卑俗なる讀者の歡心を買はんとせるもの、

馬琴の積極的態度

その當局の眼に觸れて罪を得たるは固よりその所なるべし。

この時代の小説は道德主義の見地よりして多くは忠勇貞節なる人物を主人公とし、これらの主人公は因果の理法に從ひて種々の艱難辛苦に際會し、これを以て抗すべからざる運命と觀ずるを常とすといへり。然り、此の如きは滔々たる作家が用ひたる脚色の大概にして、その基くところ半ばは施政方針にあることも前に述べたり。さらばこの屈從的態度は遂に變ずることなく、一人のこれに對して反抗を試みるものなかりしか、否然らず、馬琴は勸懲主義の泰斗なり、しかもその人物の大なりしだけそれだけ壓迫を感ずることも人に超えたりけん、その作風の圓熟し來るとともに、漸くその消極的態度を變じて、積極的態度を試みるに至れり。馬琴史を繙きて古來有名なる英雄豪傑どもの悽慘なる末路を見て、衷心不平に堪へず、その荒誕なる想像力に任せて、別に自己の天地を生み、以て禍福相轉せしめ、一面にはかれら英雄の幽魂を弔ふと共に一面遣りがたき自己胸中の磊塊を洩らさんとせり。見よ、椿說弓張月は、爲朝わが國土に力を延ばすの餘地なきを見て琉球にわたり、その子舜天丸以後、子孫相

ついでその地の王となると記し、俊寛僧都島物語は、鬼界が島に流竄せられたる僧都をしも、空しく雄圖を懷いて死せしむるに忍ひず、更に歸り來りて兵學の祕奧を義經に授け、以て源家復興の基を開けりと說けるの類是にして、更に馬琴著作中の最長篇たる南總里見八犬傳に至りては、安房里見氏の勃興を骨子として仁義を力說し、鎌倉管領の勢を以てするも關八州の兵を以てするも彈丸黑子の小國に勝つ能はざりしとす。この外に弓張月の跡を追ひて、三郎義秀をして遠島に勇を奮はしめんとせる朝比奈巡島記の如き、南朝忠臣の遺孤をして、足利義滿を金閣に射殺して父祖の讐を報せしめたる開卷驚奇俠客傳の如き、みなその例に洩れず。此の如く運命に屈從する消極的態度を一變し、進んでこれに反抗して自己の材幹を發揮せしめし積極的態度こそは、馬琴が當時の作家中に一頭地を拔ける所以にして、その小說の規模の雄大なる所以も主としてこゝにあるべし。さらば馬琴をして斯かる傾向に移らしめたるは何の勢力ぞ。或は曰く、そは歷史を讀むものの感せざる能はざる不平に基けるのみ、人生の不如意多きに對する自然の人情に出でたるのみと、この說も固より

否定すべきにあらず、されど當時の小說家が小說取締の消極的政策に對して久しく胸裡に貯へたる鬱屈の情の、偶〻馬琴によりて迸發せるものなるは疑ふべからず。而して此際馬琴が漸くその思想を變ずるに至れる原因に就ては、恐らく國學の思想に負ふ所もあるべし。卽ち八犬傳に於ける里見氏が皇室を重んじて、これに仕ふる八犬士が氏姓を改めんとするに當りても、朝廷に奏請して後始めてこれを行へりといふが如き、明かにこの邊の消息を推知すべきにあらずや。眼を轉じて畫界を見れば菊池容齋の如き、また同一思想より出でゝ歷史畫を作り、殊に好んで蒙古襲來若しくは南北朝時代に於ける忠臣義士の事蹟を描くあり。されば次に當時の國學に就いて說くべし。

東西學風の差別

前期以來、文化の盛衰東西處を更へて、京坂は漸く振はず、殊に京都公卿の窮厄は言葉も及ばぬばかりにして、公卿全體の供料を擧げてなほ中大名一人の石高に過ぎず、雲の上人の名は床しけれど扇の骨作り楊枝削りを生活のたつきとせる有樣なり。されば寶曆中すでに不平は勃發して竹內式部の事件あり、これに反して關東の地の何ぞその平和なるや。この生活狀態の反映は直ちに文學の上に見るを得べし。江戸にありては、龜田鵬齋、大窪詩佛、菊池五山、谷文晁、酒井抱一の輩、書畫の會に事寄せて、日夕宴飲に耽り、狩谷棭齋、黑川春村等は、やゝ選を異にして學術に忠なるも、訓詁考證の學を離れず、然るに京にありては、歌人に小澤蘆庵あり、詩人に賴山陽などありて、いづれも悲歌慷慨の士なり。勢ひ此の如くなれば、縣門の弟子も西と東とその居る處によりて、おのづから思想を異にせり。眞淵みづからは古道を明らむる國學者たると共に古風を詠ずる歌人なりしに、門人はしかく多方面なるを得ずして多くその一面を得るに過ぎず、而して江戸にては千蔭、春海歌人としての師の一面を傳承して風流の道に入れるに、西にありては本居宣長國學者として立ち、いはゆる皇國の大道を闡明するに至る、境遇の人を化する眞に爭ふべからざるものあり。

本居宣長

本居宣長は鈴の屋と稱す、伊勢松坂の人、はじめ醫を學ばんとして京に出でたるが、契沖の書を讀みて感ずる所ありて古學に志し、鄕里に歸りて後も深く自ら修む。縣居の翁の盛名を聞きて憧憬措かず、會〻眞淵が伊勢より畿內にかけて巡遊することありしかば、すなはち旅宿を訪ひてその門に入る。時に宣長古事

記註釋の志ある由を語りしに、眞淵大にこれを賛し、おのれもまた早くよりその必要あるを認めしが、まづ着手せる萬葉の研究に日は暮れたり、子は春秋に富みたれば、われに代りて、これを大成せよとて激勵する所あり、宣長此に於てかその業に着手し、研鑽年を積み、三十五歳といふに筆を起して、三十五年にして漸くに稿を脱せるもの、卽ち古事記傳四十八卷なり、實に契沖が萬葉代匠記とならべて、古典研究の最大著述と稱せらる。

宣長の學說

宣長の志は神代ながらの大道を闡明せんとするにありて、古事記傳も神道研究の津梁たらしめんが爲の著なり。こゝにその說を概括すれば、曰く、神道といひて別に存するにあらず、だゞ神代に於ける神々の行動を尋ねて、その跡を祖述する所にこれを見る、神代の歷史は今日の思想を以ては理解し難きこと多し、到底淺薄なる人智を以て天地と共に廣大なる神意を量るべくもあらず、さればわれらは唯仰いでこれを信じ、これを鑽仰すれば足る、强ひてその意味を解釋せんとするが如きは、儒學者流の通弊に陷れるものといふべし、日本は儒學渡來の後久しくこれに誤られて、國家或亂し、人心はた墮落せり、上古は然らず、國民は貴賤おしなべて天つ日嗣の大御心を心として、大詔畏みつかへ奉り、至らぬ隈もなき大御惠の光にかくれて、各、その祖神を齋き敬ひ、己が分を盡くして誠を踏み行へば、浦安の國いとも平けく安かりしなり、然らばわれらは今もまた神代の古に歸りて、その神ながらの道を行はゞやと、宣長の說く所を眞淵に比するに、理智の知るべからざる所は、信仰によるの外なしとする點に於て、學問的研究を離れて一歩を宗敎的圈內に入れたるものといふべきが如し。

國學の活動

されどなほ二者の所說を檢覈するに、共に眞摯なる學者の態度にして、宗敎家の口吻にあらず、而して眞淵にはなほ獨斷的の僻說と見るべきもの往々にして存するが、宣長の敬虔にして用意周到なる態度に至りては眞に敬服するに堪へたるものあり。その記紀等の古書に對するや、博引旁證、具さに異同を辯じ、研究考察これを歸納して、始めて自家の結論に達す。その爲すところ一見迂遠なるが如くにも見ゆれど、論證極めて正確にして、識見極めて超凡、洵に一代の大家たるに耻ぢざるなり。

宣長の名すでに奥羽九州の果までも轟き渡りて、來り就いて學ぶもの多く、自

ら高く標置せる公卿達の偶、渠が在京を機としてその講筵に列するも少からず、かくて門下幾多の俊秀を出しゝが、就中古道を紹述してその眞意を明らむるに力ありしを、平田篤胤とす。篤胤は出羽の人、いまだ刺を通せざるに先だちて宣長は歿せしかど、深くその學説を喜びて欽仰措かず、先師歿後の入門者として、その名を門下に列せり。その學問は該博と評すべからざるも、人となり剛毅果斷、一身を捧げて古道の宣傳に從事せり。余はこゝに始めて古道の宣傳といふ、然り、宣長の國學は寧ろ單に學問としてこれを究むるに過ぎざりしに、篤胤は進んで敬神祭祀の式を定め、儒佛二教の影響多き舊神道を排して、別に平田派の神道を起すに至れり。而して聲を大にして國民が覺醒一番、千餘年來百般の事物の上に被り來れる外來文化の影響を一掃して、皇國の大道を發揮すべきことを説いて止まざりき。これらの宣傳は果して國民の自覺心を喚起し、上代の王政を愉悦するの結果やがて勤王愛國論の勃興となり、折ふし外交の事漸く繁きに會して、更に攘夷説と相結び、遂に目覺しき維新の大業は成就せられたり。げにも明治の革新は百年の昔既に國學者の夢裡に往來したるものにして、これを先にしては水戸學の倡道あり、これを後にしては宣長篤胤等の主張あり、いはゆる維新志士の思想がこれに養はるゝこと多かりしは否定すべからざる事實にして、固より志士の中には國學者の輩も少からざりしなり。

大化の改新と明治の維新

明治の世

明治の維新は有史以來未曾有の大變革なり。これよりさきわが國の歴史上、政治的はた社會的の變革と稱すべきもの、太古の時代には大化の改新あり、中世の時代には文治の幕府創立あり、近世にありてはまた慶長の江戸開府あり、何れも明治の變動に比すべきが如きも、具さに比較し來れば、その間大に事態の異なるものなくんばあらず。江戸幕府の樹立は、紛糾極りなき百年の大亂この時に收まりて、塗炭の苦を嘗めし天下の民衆始めてその生業に安んじ、枕を高うして眠るを得たりと雖も、この禍亂鎮定を外にして、政治もしくは社會組織の上に何等根本的改造の行はれたるを見ず、これらの點に於ては家康は單に鎌倉幕府創立者たる頼朝の先例に倣へるものに過ぎざるなり。さらば家康の標範と仰ぎし鎌倉の開府は如何の事情の下に行はれたるかといふに、政治の中心はこの時始めて京を出でゝ關東に遷り、公卿を離れて武士の手に歸した

り、これ疑もなく政治上の一大革命なるべしと雖も、これも政治の中心と樣式とが移動したりといふまでにて、國民の思想生活乃至風俗習慣等に至つては舊樣依然たるのみ。然るに更に泝りて大化の改新に至りては文字通りの大改新にして、これより先き既に傳來せる佛教と支那文物との影響を受けて、國民の思想生活は一時に向上し、これら外來文明を參酌して、目覺しき大刷新を行へるものなり。わが明治の維新はひとりこの大化の改新に比して語るべし、曾に政治上の根本とのみいはず、あらゆる制度も、風俗も、はた文藝の道も、事々物物面目一新、舊習はすべて弊履の如く擲たれて、痕跡だも遺さゞることとなれり、これを驚天動地の變革と呼ばずして何ぞや。さらばこの大化の改新にも比すべきわが明治維新の事業は如何にして發現せるか、言ふまでもなくわが國民が西洋諸邦の民と接觸して、その文明に刺戟せられたる結果にして、この點もまた明治の維新が文治、慶長兩度の變革と全くその趣を異にし、ひとり孝德帝の新政と事情を等しうすといふべし。類似はこのれみにあらず、大化の改新といひ、わが明治維新の變革といひ、急轉直下、かばかりの大英斷を施しながら、

勤王論と開港說

上下一致、何等著しき人心の動搖を起さず、從つて甚しき流血の慘を見るが如きことなくして、殆ど平和裡にその理想を成就し得たるは歷史上の奇蹟にして、海外人の眼を睜りて驚く所にあらずや。

海外諸國との接觸は疑もなく明治の維新を促進せる最大原動力なり、然りと雖も更に委しくその動因を索むれば、勤王論と開港說と相結べる結果といふを正しとせん。二說は固よりその初に於て扞格相容れず、卽ち勤王論とは、上代の制度を考覈して、王政思慕の念一日も止みがたく、從つて江戸幕府の存在を憤れる國學者流の見解に基づきて起れる一派の主張にして、幕末當時、爲政者等が外交を云爲して夷狄と步調を共にせんことを計る如きは最も嫌忌する所なり。これに反して開港說は幕府に黨するものの主張にして、かれらは海外諸邦の事情を知り、世界の大勢に通じて、通商貿易の必然止むべからざるを說く。此に於てか前者の怒は後者が益、外邦と接觸を遂げんとするに及びて、制すべからざるの勢となれり。討幕と攘夷とはやがてその標語とする所にして、勢の極まるところ未曾有の政變は實現せられたり。されど勤王論者も、幕府を以

て當面の敵とせる間こそ、敵の主張たる開港説に反對して鎖港主義を把持するの要を見たれ、いよ〳〵王政一新、海内一統の世となりては、鎖港主義に重きを置くの要なきのみならず、廣く世界の情勢に眼を放てば、通商互市の止むを得ざる勢にあるは、蘭學者ならずも、苟くも一隻眼を具ふるものの心附かざるを得ざる所にして、開港貿易は漸く天下の輿論となれり。されば開港貿易は、その初は幕府の措置に出でたりと雖も、新政府代りてもまたこれを改むるに及ばず、寧ろ或る時期を過ぎては、擧國一致翕然としてこの方針によりて進む。乃ち西歐の新文明はこれより決河の勢を以て迸注し來り、新しき國家はその長所を取りて、一意世界の大勢に後れざらんことを期するに至れり。若し當時の國民にして何時までも悟らず、自らその門戸を閉ぢて、桃源の夢を貪りたらんには、今日の吾等は果して如何の狀態に在るべきか、想ひ見るだに戰慄を禁せず。

國粹説と洋化説

斯くて日本固有の精神を發揮せんとする國學者流の國粹保存説と、開港貿易によりて西洋文化を輸入せんとする外國文明謳歌説とは、維新を契點として相接觸提携するに至れり。されど二つのものはもと尊王論と佐幕説とが相對峙せるが如く、全然その立脚點を異にせるものなるが故に、維新後に至りても各、事に觸れつゝその鋒鋩をあらはし、あらゆる方面に於てその軋轢を見るべし。明治四十年の歴史といふも、畢竟二者の消長の跡にして、換言すれば國粹が那邊までよく發揮せられ、また泰西文明が那邊までよく消化融合せられたるかの總勘定なり。この見地よりして觀察を下すに、明治維新後の舞臺は凡そ十年毎に一線を置きて考察すべきに似たり、卽ち維新の時より西南の役までが一期なり、次に十八年乃至二十年の頃ほひいはゆる歐化主義がその絶巔に達せるまでがまた一期なり、而して日清戰役まではまた一期とすべし、さらば今の時はすなはちその後を承けたる最後の一期の途中または末期に際するか。たゞこの間前後通算するも半世紀に足らず、一々章を設けて論ぜんもことごとしければ、一括してその大概を敍づるに止めん。

維新の改革

維新後の革新は社會のあらゆる方面に及びて面目全く一新せり。幕府の壞倒

と共に王政復古して、程なく江戸は東京として帝都となり、やゝ後れて立憲の制を採りしは更にもいはず、諸官制の上にも幾度か注目すべき變更あり、或は藩に代へて縣を置き、地價を定めて租税の法を立て、士族の家祿を奉還せしめて、國民皆兵の令を布けるなど、擧げ來らば際限もなかるべし。しかもその革新の中にて、階級制度を打破したるの一事の如きは最も著しき事象にして、貴族追從の制はこれより輕く、公卿の齒を涅め眉を剃ることも止み、庶民僧侶と雖も等しく氏を稱するに至り、殺伐なる佩刀は禁ぜられて、瀟洒たる散髮頭を撫でて喜ぶ。華士族平民何の隔てなく婚嫁するを得る世の中なれば、人身賣買の弊風の如きは固より昔日の語り草となりて、騎馬に鞭ちて道ゆく平民の得々たる姿を見よ。此の如くにして華士族平民と名は三樣に存すれど、國民としての權利は殆ど同一になりて、從來の如き差等なく、個人はおのがむき〳〵にその生涯の目的を定めて職業に就き、名もなき家の子の才によりては青雲に駕するも難き業にあらず。こゝに至りて自由平等の福音は春風の如く全國に渡れり。

保守的暴動

されど何時の世とても絶えざるは新舊思想の衝突なり、かゝるめでたき御世となりても世間往々にしてその革新を喜ばず、頑冥固陋の說を持して、光榮ある新政府の施設を破壞せんとするものあり、維新頭初十年の間はこの種の思想屢〻事變を生み、或は要路の大臣の路上に殪さるゝあり、或は幕府再興の企の所々に企てらるゝあり、或は舊藩主が東京に居を構ふるは累代相結べる領民を棄つるものとして一揆を起せるものあり、或は四民平等の制は却つて平民を賤視せんとするものにあらずやとて憤慨せるものあり、そのほか兵制の改革に反對し、特に徵兵の告諭に於ける血税の文字に拘泥して、政府は文字通りに人民の豪血を搾り取るにあらざるかを恐れ騷ぎたるが如き、今日より見れば滑稽と思はるゝ程の事件もあり、或はまた學校の廢止を迫るもの、太陰曆の復活を主張するものなどありて、暴動や運動の種類少からざりしが、要するに何れも前代の因循姑息なる色眼鏡を以て新時代に對せるの結果、驚異と過去追慕と相扶けて起りたる悲喜劇に過ぎずして、その奇拔なる脚色は今日われらを失笑せしむるもの少からず。

物質的事業の進歩

事態此の如くなれば、維新實現の後も政府者は屢〻改革に惱みて、國民間に於ける精神的文明の活躍を見ず、たゞ物質的文明に至りては、その野にあると朝にあるとに論なく、國民擧つてその汲收に腐心すれば、日に月に注目すべき成果を得たり。蓋し皮相的なる物質的方面はこれを精神的方面に比するに、誰の目にも附き易ければ、我と月鼈雲泥も啻ならざる西洋の進歩せる事物を見て、一意これを輸入せんとせるも當然のことといふべし。此に於てか電信通じ、郵便開け、瓦斯燈も輝けば、電燈も光る、東海道五十三次に沿うて布かれたる鐵路は十餘日の行程を一日に縮め、昔膽を冷しゝその黑船に乘らぬを肩身せましとするものをかし、牛肉に舌鼓うち鳴らすもの、羅紗のズボンに流行を追ふもの、千態萬狀なる衣食住の新樣には、時人も互に相望んで微笑を禁じ能はざりしなるべく、五七年が程に日本の社會は生れ變れりとは屢〻余輩の耳にせる老人の物語なりし。

前代文藝の破壞

文藝もまた一度は維新の大浪に攫はれたり、國民はひたすら物質的生活の改善に忙殺せられて、また他を顧みるの餘裕なく、趣味性の墮落、戰國の世もまた此の如きかと覺ゆるばかりなり。ひとり文藝のことのみにあらず、倫理然り、宗教然り、形而上のこと、悉くみな然り、神佛の分離に伴ひて佛寺の廢毀夢よりもはかなくして、その由緒ある寶物は事もなげに賣拂はれ、偶〻賣られんとして買ふものなきが爲に燒かれんとして僅かに傳はるを得たる興福寺五重塔の如き例は恐らく他にもあるべし。もしそれ貴重なる典籍の散佚したるもの夥しかりしも更めて說くに及ばず。

第一期の文學

明治第一期の文學は此の如くにして殆ど見るに足るものなし、强ひてその人を求むれば、江戸時代戲作者の名殘として假名垣魯文の名を擧ぐべし、魯文滑稽の筆を弄して、西洋膝栗毛を作る、言ふまでもなくこれは一九の東海道中膝栗毛に倣ひて、その舞臺を西洋に取れるもの、一も二も西洋の世の中なれば、この著も時人に喜ばれたれど、その滑稽沒趣味にして、文學として彼此論ずべき程のものにあらず、脚本界には河竹默阿彌あり、ひとり斯道に聲譽を恣にすと雖も、その作物は依然として舊時代のものにして、到底新時代の要求に應ずべきものにあらず。この他にも多少注目すべき文人なきにあらざるも、江戸文學

を一層引き下せる成島柳北の戯文戯詩を以て、一代に重きをなせるが如きを思へば、餘は推して知るべし。要するにこの時代の文學はその方面の何れにあるを問はず、陳腐の思想を前代そのまゝの舊形式に盛れるものに過ぎずして、如何に最負目に見るも、明治文學の曙光を示すものとはいひ難からん。

一般知識の進歩

精神的文化の不振やそれ此の如し、唯かゝる中にも一般國民の知識の普及に對する事業は着々として進めり。既に江戸時代もその以前に見るを得ざりしほど學問の發達せる時代にして、貴賤上下おしなべて智識の修得に心掛けたるが、なほ百姓町人間にはこれが無用を唱ふるものもなきにあらず。しかるに明治の世、學制の布かるゝに及びて、男女六歳を學齢として必ず學校に上るの義務あり、津々浦々いづこの山の奥とても咿唔の聲を聞かざるはなし。而してこの學校教育と相俟ちて愈〻國民の知識を啓發するに力ありしは、活版の發達に伴へる新聞紙の發行なり、新聞紙の萠芽は既に文久年間にこれありしが、明治初年に至りて政府がその政治日程を公布せんが爲、世に出せる太政官日誌は今の官報の基を作り、中外新聞、江湖新聞は民間新聞紙の魁として現はれ、これより續々新聞紙の發刊あり。四年、西洋紙及び西洋活版術の用ひらるゝに至りしは、正にこの事業の進歩に一期を劃するものにして、その影響は單に新聞紙發展の上に止まらざりき。およそ印刷術の一國の文運に至大の關係あるは今更言ふに及ばぬことにして、江戸時代の文學がかくばかりの盛を致せりといふも、その主因の一はまた確かに印刷術の進歩にあるべし。活字版は、前にも說けるが如く、江戸時代にありても試みられたることありしが、幾ばくもなくまた整版に勢を奪はれて、廣く行はるゝに至らざりしもの、然るにこの時に及びて專ら洋式に則りて、大にその術を研究し、時事を最も迅速に報導すべき使命を有する新聞紙の發行と相呼應して、頓に飛躍を遂げ、書籍の刊行せらるゝものまた從つて日に相續ぎ、これらの新現象はやがて偉大なる明治文學を建設するの基礎ともなれり。

新文明の鼓吹者

このごろ三田に慶應義塾を起せる福澤諭吉は學問の普及、社會の進歩に功績ある第一人者なり、その教育に對する摯實の態度と、高遠なる識見とは當時何人も及ぶ能はず。著述も多かる中に世界國づくしは記憶に便ならしめんが爲

に七五調を以て歌ひ、詩としてこれを論ずれば內容寧ろ乾枯、多くいふに足らずといへども、讀誦一過、泰西國情の髣髴として映じ來るものあるは注意すべし。その他西洋事情、學問のすゝめ等を著はして、專念新文明の鼓吹に努めたる國民指導者としての功勞は長く沒すべからざるものあり。その平明暢達の文體を創始せる如きもわが文章史上忘るべからざるものにして、これは決して不用意の間に生れず、刻苦推敲、一方には文語と口語との調和を計りて、文體の自由を期すると共に、一方には漢字を制限して平易を求め、以て從來行はれたる粗大誇張の漢文調を打破して、精緻の思想を十分に發表し得べき一新文體を剏めんとする熱心の賜にして、かれが一文を草するや、必ずその婢に讀みきかせて訂正するを怠らざりしといふも、この間の消息を明かにするものなり。實にわが明治の文體は福澤によりて略その形式を整へたりといふも過言にあらず。私塾を開いて洋學を敎へたるものの中、三田の福澤を除いては、同人社を建てたる中村正直を推すべし。正直はじめ昌平校に入りて漢學を學び、のち洋學を兼修して、スマイルスの西國立志編、西洋品行論等を譯す。これ等の譯書

第一期の概括

によりても渠が社會改善、品性陶冶に重きを置きしは疑を容れず。なほ明治七年來國より歸朝して、京都に同志社を興し、耶蘇敎主義を奉じて、育英事業に身を獻げたものに新島襄あり。また得易からざる傑物にして、新文明の扶植は大なる援助をこの人に得たりと云ふべし。

此の如くにしてこの期間の純文學に就ては特筆すべきものなし。唯かゝる間にも或は翻案翻譯等を試みるものありて、幾分にても外國書を紹介し、或は文體上一新工夫を積みて文章の改革を企つるもの等ありて、未だ結果の穗にこそ出でざれ、文藝に對する素地もまた漸く培はれつゝありしを思ふべし。

歐化主義の一轉機

明治十年の西南の役は、維新以後各地に續發せる小暴動と日を同じうして語るべからざる大事件なりき。事變の影響は殆ど延いて全國に及び、人心の動搖も從つて甚しかりしが、この役は偶、叛亂を釀さんとするものの訓戒となりて、城山の陷落と共にまたこの種の擧を企つるもの全く無きに至れり。言ふまでもなく一世の豪傑西鄕隆盛の力を以てしても、官軍に抗すべからざるを知悉

せしめたればなり。かくて國家は速かに靜謐に歸したるが、維新後極端なる歐化主義を望んで、政體制度一に彼に則らんとする急進思想は漸く盛にその頭を擡ぐるを見たり。蓋し曩に隆盛が官を辭して鄉國薩摩に歸りしは、己の發議せる征韓論が廟議に容れられざりしが爲にして、兵力に訴ふるに至つて一敗地に塗れたるなるが、隆盛と共に袖を列ねて野に下れる板垣退助等は爾後專ら言論によりて政府と勝敗を決せんとするに至れり。民權自由とはやがてかれらの標語にして、これに共鳴する有志の徒は、一時板垣の鄉國土佐を中心として全國に蔓り、自由溫泉、自由煎餅、自由丸、自由亭など、さらでもあるべきものにまで爭うてこの珍らしき新語を冠らせたり。以てその過激なる自由思想の時代精神に投じたる一斑を推すべし。

急激なる政治論

佛國の革命時代は當時國民が憧憬の的たりき、理想的人物としいへばヴォルテール、ルッソー、然らざればモンテスキューなどにして、中江篤介ルッソーの民約論を譯して最も盛なる自由主義を倡道すれば、烏尾得庵王法論を著はしてこれを破し、人權新說に保守の見を發表する加藤弘之あれば、天賦人權論に

これを反駁する馬場辰猪あり、喧々囂々底止する所を知らざる是非の議論は、民權自由か否かの問題ならざるはなし。明治初年以降、一に米國の功利主義によりて行動せる天下は、こゝに至りて全く過激なる佛國思想によりて席捲されて了んぬ。壯士となん呼ぶ無賴の徒が各地到る處に橫行濶步し、また「官吏の跋扈を見る時は、悲憤慷慨扼腕する、竹槍蓆旗で堂々と、一時に亡ぼす夢を見た、愉快々々」などいへる殺風景なる壯士歌が巷間に行はれたるも、皆この頃のことす。

政治小說の流行

當時の日本は正に革命前後の佛國の如く、狂瀾時代の獨逸にも似たるかな。而して國民は誰彼となく政治運動に奔走するの時なれば、文藝もまた大にこの影響を蒙れり。十年の役後は、新聞紙の必要が切實に國民の間に感ぜらるゝと共に、その發行部數の增加驚くべきものあり、從つてこれが編輯に携はれる文筆家は、國民の輿望を負うて立ち、往々椽大の筆を揮つて政治を論ずるものあり。これに載する小說の類も或は維新前後における尊王佐幕兩派の軋轢、或は佛國の革命運動、或は露國の虛無黨の陰謀などを材料として、殺氣勃々、腥風陰

森、一括してこれを民權自由の論評に熱中するものと見るを妨げず、その文體は福澤の平易なると選を異にし、佶屈贅牙、寧ろ生硬未熟なる漢文直譯體を以て格調の勇健を期す。就中最も嘖々の名ありしは矢野龍溪の經國美談にして、往昔、希臘の聯邦が互に覇を爭へる時、シーベスの名士エパミノンダスがペロピダズと協力して、國威を輝かしたる歴史的事實を記す。その外、東海散史の佳人の奇遇、末廣鐵腸の雪中梅、須藤南翠の綠簑談の如き、何れも政治的狂熱時代の影像といふべし。然れどもこれらの士はみな文學專門の人にあらず、寧ろ政論家として世に立てるものなれば、藝術的見地よりこれらの著述を評價せんは酷といふべきか。

西洋文學の飜譯

西洋小說の飜譯も十年代になりて漸く色めき立てり。立志篇の飜譯の如きは前にあれども、文學的作品といふべきものの飜譯は未だ現はれざりしに、明治十二年に至りてアーネスト、マルツラヴァースを譯せる花柳新話なるもの始めて世に出でたり。此書の原著者は有名なるリットン卿にして、譯者を織田純一郎といふ。これよりリットン及びヂスレーリを筆頭として、ユーゴーなど盛

に傳へらるゝに至れるが、併しながら概していふに、これらの飜譯小說もまた多くは純文學飜譯衝動によりて成れる產物とは稱し難きもの多し。卽ちこれらの飜譯小說は何れも當時泰西政治社會の情勢に通じたる政客乃至新聞記者等の手に成り、言はゞそれら先進國における先輩の生活を欣慕するの餘りに、その政治的或は歴史的の述作を取つて飜譯するに至れるものにして、從つてその原著者が主として政治方面に於ける知名の士なるも當然のことなるべし。たゞこの頃の飜譯中にありて嶄然異彩を放てるは外山、山等が編せる新體詩抄なり。これは間々編者等の自作も打ち交れど、多くは西詩を譯出せるものにして、その眞價に就て兎角の議論はあれど、新體詩の一體がこれによつて始めてその存在を認められたるは事實なりとす。

粗笨なる文辭

さりながら詩にあれ、小說にあれ、すべてこの時代の飜譯は、他の創作と同じく文辭おほかた粗笨蕪雜にして、賞すべきもの少し。その中いはゆる新體詩は在來の俳句、短歌等の小詩形を排して、長歌などの如く七五の句を制限もなく疊み綴りて、長篇を作り出すもの、その形式としての新樣は見るべしと雖も、用語

生硬にして風體未だ雅健ならず、當時の散文に較べて果して幾何の趣致あるか疑ふべし。小說の文體に至りては更に一層蕪雜にして、未熟幼稚なる漢文直譯體か、もしくは馬琴一流の讀本口調のみ、微妙なる人情の極致が、これらの文體によつて寫さるべくもあらざるは、更めて言ふを須ひざる所なり。

淺薄なる內容

以上は形式の論なるが、當時の小說の內容に於てもまた見るべきもの極めて少し。蓋し當時の小說は、多くは政府の壓制、志士の反撥など、政治社會の現象を以て對象とし、その取材の範圍頗る狹少なり。しかも更に進んで言へば政治社會を對象とすといふものの、實は單に皮相を包む口實に過ぎざること多し。卽ちその主人公は概ね一箇の才子にして、これに對する美人あり、その綢繆纏綿たる情事の經緯、さながら春水以來の洒落本に異ならず、そのたゞ異なるところは昨の通人藝者が今の壯士才女となれるのみ。

坪內逍遙

この時に當りて隱然自ら文藝批評界の木鐸を以て任じつゝ、小說神髓の一書を著はし來りて、腑甲斐なき文壇の傾向を一掃せんと試みたるものを坪內逍遙とす。逍遙これよりさきリットンのリィエンヂー、シェークスピーヤのシーザー等を譯出して、當時文壇の政治的風潮に投せしが、今や飜然としてその非を悟り、藝術が決して實用の奴隸たるべからざるを唱へて、これを政治の具たらしむるは勿論、また馬琴一流の勸懲主義に陷ることを戒めて、作家は宜しく有りの儘なる客觀的寫實によりて藝術の妙境に入るべしと主張す。その所論今日より見れば寧ろ平凡の說に過ぎずと雖も、當時にありては尤も適切の言にして、筆硯に親むの士を啓發する所多く、文壇は一時全くその寫實主義によりて風靡せらるゝに至れり。而してこの主張をまづ創作の上に試みて天下に實例を示しゝも逍遙その人なるは注目すべし。されどその當世書生氣質の一作は決して小說神髓の意見を體現せるものといふべからず、主人公たる青年は當代の標本的書生なりといへど、實は舊樣依然たる洒落本系統中の人物にして、僅かにその外面に明治敎育の新衣を纏へるを見るのみ。とはいへ、この論この作一たび出でて、讀書界の風潮が一變せるは疑ふべくもあらず、卽ち從來江戶時代の陳腐なる作風には趣味を感せず、さりとて維新以來の政治小說の淺薄なるにも眼を覆へる人士は、こゝに始めて小說の讀物として耻かしから

ぬものなるを會得し得たり。この意味に於て二書はわが文學史上に一期を劃するの名著にして、ひとり小說界の恩人たるのみならず、明治文學の啓發者として著者の名を錄するも過褒にあらざるべし。

歐化主義の高潮

明治十年代は國民を擧げて西洋文化に心醉せる時なり、この風潮は十七八年頃より殊に著しく、逍遙の小說論の如きも、外國における藝術論を假り來りて、我に應用せるものにして、言文一致體が漸く小說界に勢力を占め來れるもこの頃の新現象なり。羅馬字採用は盛に倡道せられ、英語は國民敎育に於ける必修の課目とせられんとす、中には人種改良と稱して東西人の雜婚を慫慂するものもあり。而して二十年鹿鳴館に假裝舞踏會が總理大臣伊藤博文主催の下に開かれたる頃は、歐化熱の正に最高潮に達せるものといふべし。また此頃に至りては維新以後新敎育の修得に志せる人々も、一かどの人物となりて、今よりはその修得せるところを提げて、直ちに實地に行はんとす。西洋文明の紹介を以て主なる使命とせる國民の友が雜誌界に呱々の聲を擧げしも二十年の春のことならずや。同誌の主筆德富蘇峰は別に新日本の青年と題する一書を公にして、現代青年は須らく歷史的束縛を脫して、獨立自由の氣象を養ひ、泰西の新道德思想を輸入すると同時に、國家を衰朽せる老人の手より奪ひ、根本的に新日本の經營に當らざるべからずと絕叫す。たゞ時勢は轉じて止まず、西洋謳歌の聲は二十年以後も依然として聞かれざりしにあらずと雖も、一方に於て新しき反動は起れり、復古主義これなり。

新文學の勃興

明治二十年代は純文學勃興の時代なり、十八年に出でし坪內逍遙の書生氣質はよく作風一轉の機を興へたるも、作そのものには大なる價値あるにあらず。ついで同じ人の妹背鏡あり、こたびは人情世態の表裏を寫して、その觀察やゝ細に入りたれども、なほ直ちに痒きを搔く心地はせざりしに、氣凝るところ霧と布き霞とたなびかずんば止まず、こゝに至りて一篇の傑作浮雲は衆人翹望の的として現はれたり。浮雲の作者を長谷川二葉亭とす、その文章は對話のみならず、地の文をもすべて口語體を以て行り、むしろ平凡なるが如き家庭の波瀾を捉へて、心ゆくばかりの描寫を試む。尙にこれ當代小說壇の逸品にして、小

説神髄の主張はこの一作によりてほゞ遺憾なく實現せられたる觀あり。余は前に書生氣質を論じて劃期の作に擬したるが、これを浮雲に代へて小説神髄と並べて明治文學史上の二大述作とせんには如かず。この頃また純文學に熱心なる一團の青年の自作集我樂多文庫を公刊して文壇を驚かすものあり、これを尾崎紅葉等の硯友社同人とす。この前後、書籍及び雜誌の發兌相續ぎ、雜誌のみに就きていふも、廣津柳浪の大和錦あり、硯友社を脱せる山田美妙の都の花あり、森鷗外を主筆として西歐文學の移植に力めたる柵草紙あり、紅葉の色懺悔を第一篇に載せたる新著百種あり、今に續刊せる新小説もその初號はまたこの頃に出でたり。

紅葉と露伴

當時小説界に雄を稱せるは言ふまでもなく尾崎紅葉と幸田露伴となり。紅葉は色懺悔以後その作出づるとして高評あらざるなく、露伴の名は風流佛に現はれて、五重塔によりて愈〻高きを加ふ。二者の特色を比較すれば、彼は筆致優麗にして、穏やかなる婦女子の情を寫すに巧に、此は好んで偏僻の人物を捕へて、文辭また豪宕遒勁の趣あり、前者はその想その筆の圓熟するに從ひて愈〻活社

會の寫實に進み、後者は飽くまで理想に着して、自己の豐富なる想像力を發揮す、一を客觀的とすれば他はやがて主觀的といふべし。紅露の二人を措きては山田美妙、饗庭篁村、齋藤緑雨等の名を記すべし。逍遙の細君、鷗外の舞姫及びうたかたの記の如きまた大に世評に上りしが、この二人は寧ろ批評家として盛名あり、その沒理想論における二家の論戰は當代稀に觀るの偉觀なり。なほこのころ一人の女流天才あるを忘るべからず、即ち樋口一葉が女らしくやさしく人情の機微を穿ちたる作風は男子の及びがたしとする所にして、彗星の如く來りて慧星の如く去りし浮世二十五春秋、文壇五星霜の短生涯は、はかなくもまた目覺ましといふべし。

復古主義の活動

斯くこの時代に文學の勃興せるは、名家の輩出せるにもよれど、一面社會の事情にも歸すべし。見よ、二十二年には憲法發布せられ、二十三年には久しく國民の期待せる帝國議會の開設を見るなど、國家の前途は眞に洋々として春の海の如く、一時政治に狂奔せる國民の感情も何とやら柔らぎて、その注意は自ら學問文藝の方面に向へり。しかも當時文壇の風潮は國民の友、柵草紙などのあ

るありて、外國の影響を受けたれども、その勢力はまた十年代の昔に比すべくもあらず。雜誌日本人が泰西文明の缺點を指摘して復古主義を倡道せるが如き、時運の漸く動かんとするをトすべし。井上毅が文部大臣の椅子にありて國語教育を奬勵せし頃より、わが國古典の研究俄然として起り、西洋崇拜の思想は何時しか國粹保存主義に壓倒せらるゝに至りぬ。

古典の研究

時運の爭ふべからざるや、出づるとして出づる書籍は、日本文學全書を初として古典に關するもの極めて多く、ひとり奈良、平安文學の寶庫が開けたるのみならず、近世文學もまた研究その緒に就けり。明治初年の文學は、江戸時代の脈を繼承すといふも、僅かにその末期における馬琴、種彦、春水等を摸するに過ぎざりしに、こゝに至りて西鶴の小說、近松の戲曲を見出し、近々二百年の昔に斯くまでの名家あるを知らず顏うちに過せるを訝かる。殊に紅露の二家は痛く西鶴の筆致に傾倒し、後にこそおの〳〵自家獨得の長所を發揮するに至りたれど、一時はこれを摸倣して及ばざるを恐るゝの風あり。一葉もまた熱心なる西鶴崇拜家にして、その感化を受くること多かりしは、苟くもその小說に接するものの熟知するところなるべし。

正岡規子

正岡子規が俳壇の新人として創作に批評にその縱橫の才を揮ふに至りしも、また古代文學の研究にその端を發す。卽ち俳句はこれまで芭蕉を以て斯道の神とし、樣によつて葫蘆を畫くに過ぎざりしに、子規はその月並調を喜ばず、病軀に鞭ちつゝ、刻苦勉勵、非凡の批判力に任せて芭蕉の句境を檢討し、のち更に蕪村の句集を發見するに及びて、その長所を自家藥籠中に收めて、遂に日本派の樹立を見るに至る。子規は實に才子なり、されど若し歷史的研究を積むこと此の如くならざりせば、果して俳壇中興の祖として、元祿の芭蕉、天明の蕪村と併稱せらるゝを得たるべきか、疑なき能はず。

劇場の形勢

古今を比較してわが國民性の長所を發揮せんとせるは、この時代一般の風潮にして、何れの方面を見るも歷史的研究の盛なる驚くに堪へたり。雜誌史海の發刊ありて、夥多の讀者を吸收せるも固より偶然にあらず。繪畫に歷史畫あり、小說に歷史小說あり、脚本に史劇あり、劇壇には河竹物漸く勢力を失はんとして、市川團十郎のいはゆる活歷物新たに人氣に投じ來る。この活歷物を書き下

ろせるは依田學海、福地櫻痴等にして、その作は專ら史的考證に重きを置き、言語服飾等に至るまで古代をそのまゝに寫さんとし、事實に卽して空想の容るべき餘地なく、無味乾燥厭ふべきもの多しと雖も、時勢の要求する所は正にここにありしなり。同じころ壯士芝居と呼ばるゝ一派の演劇も起りたるが、その起源を尋ぬれば、をりふし政治運動の衰へたるまゝに、今や活計を失はんとせる徒輩が試みに始めたるものにして、事々しく藝術的價値を論らふべきほどのものにはあらず、社會に於ける勢力の如きも、既に傾ける舊劇にだも及ばざりしは、當然のことといふべし。若し夫れ逍遙が史劇を論じ、前に小說神髓に對して書生氣質を著はせる筆法を以て、その所論を具體化せる桐一葉、牧の方などを書けるは注目すべき現象たるを失はざれども、脚本として世に行はるゝのにみして、習慣の壓制は未だこれを舞臺の上に演せしむるに至らず。

第三期の概括

一括していふに、二十年代は復古的精神の漲れる時期にして、事々物々の上に國粹を發揮せんとす、今說き來れるものの如きは單にその一斑に過ぎず。しかも一言注意し置くべきは、國粹保存といへど、これを曩日の固陋なる攘夷說などとは同一視すべからざることなり、一面國粹の保存を要とすると共に、泰西の文物は障礙なく輸入せられて、彼此漸く正しき判斷を待ちて取捨せられんとせるなり。

二十七八年戰役

明治二十七八年頃は更に文學史上に一時期を劃するものの如し。時は日清戰爭の前後にして、帝國の勝利は大に國民の自信の念を强うせしむると同時に、これより西洋諸國との關係一層複雜に赴き、彼我の交通及び貿易も益、發達して、東西兩洋を隔つる萬里の波濤も今はわづかに一葦帶水のみなるの觀あり。文化の研究もまたこの機運に後れず、有らゆる方面に於て彼の長所を取りて我に融合せんとし、文學的創作の飜譯の如きも前日の杜撰なるものの比にあらず、進んでは創作家の彼の思想的色味を加へてわが作を豐富にせんとするものもまた多かり。

心理小說

げに二十七八年の戰爭は國家の財帑を費すこと夥しく、その初に當りては勝敗の決何れにありとも信じ難ければ、國民疑惧の念に驅られて、諸般の事業す

べて一頓挫の姿あり。されど勝算すでに立ちては反動の活氣頓に生じ、二十八年の內國博覽會には美術までも一代の盛運を示せるが如く、文學もまたその頃大なる進歩を示せり。此に至りて二十六七年の頃一たび廢刊せる雜誌も再び發行せられ、新たに起れるものはその數更に多く、これらの雜誌によりて新作家の名を傳へられたるもの固より二三に止まらず。小說の內容もこれまでの如き甘たるき情事のみを以てしては、新社會の嗜好と相容れがたきを知り、轉じて社會の暗黑面に筆を着け、また觀察は飛んで日進月歩の競爭場裡に敗北せる人々の境遇に及び、また或は肉體的或は精神的なる不具者の上に及びていはゆる心理小說もしくは悲慘小說と稱せらるゝものを生ずるに至れり。この新傾向を代表せるものは廣津柳浪、泉鏡花等にして、既に老成の域に達せる紅葉もこれに刺戟せられて多情多恨を出せり。この小說は作中の人物甚しく多からず、事件の變化も極めて少けれども、厖然たる長篇、人情の委曲を寫してまた餘蘊なく、その口語體の文章も圓熟して、ひろく世の文範と仰がれたり、蓋しこの一篇は紅葉一代の傑作として推重するに足るものなり。ついで同じ

思想界と批評界

著者は有名なる金色夜叉を著はし、失戀の極、貪婪無殘の高利貸となれる青年を主人公として、最も深刻の趣致を極めんとせしが、その輕快洒脫の性は殘忍冷酷の人を描くに適せず、その筆の到底人生の暗黑面を描くに堪へざるを暴露したり。文章も口語體より文語體に歸り、技巧を弄して綺麗に過ぎ、駢儷體の一典型中に固定せる嫌なきにあらず。これを多情多恨に比ぶるにすべての點に於て著しき遜色あり、作者もまた自らその短所に心附きけん、氣沮みて筆漸く動かず、完結を告ぐるに至らずして逝けるは痛惜すべし。

當時思想界に於て名ありしは大西祝と清澤滿之となり、明治の哲學、明治の宗教をいふものは必ず二人の名を逸すべからず。この二人に比べて思想の深邃は遠くこれに及ばざれども、才藻豐富にして活氣に富み、評壇の一方に睥睨して、常に問題の提供者となり、青年の崇拜の的となりしもの、高山樗牛に如くはなし。樗牛謂へらく、凡そ文藝に携はるものは時代精神のある所を察せざるべからず、苟くも時代の思潮に觸れざるものは文學として取るに足らず。これより進みて日本固有の國民性を發揮するの必要を唱へ、いはゆる日本主義を

倡道する一派の人々の中に加はりて、喧傳これ力むされどその後ニーチェを祖述して、超人説を鼓吹するものあるに至りて、渠の思想も漸くこれに動かされ、或は美的生活を説き、或は平清盛、日蓮上人を憧憬せる論文を出して、個人の意思の最も重んずべきを説けり。樗牛の後、綱島梁川あり、熱烈なる信仰によりて見神の實例を披瀝するに流麗なる文章を以てし、聲名一時に傳へたり。惜しいかな、これら四人共に早く歿して、爾來思想及び批評界の轉た寂莫なること。

寫實小説

創作の風尚も批評の傾向と相並びて進歩し、寫實主義、自然主義を把持するもの漸く勢を得たり。その主張は一言以て蔽へば、小説は實人生の姿をありのままに丁寧に筆寫すれば足るといふにあり、小杉天外、小栗風葉等まづこの一派の主領として仰がれぬ。顧みれば二十年代の小説はその以前に比べてこそ頗る見るべきものあれ、なほ習慣の力に制せられて、直下に眼前の人生に觸るゝに至らず、その人物舞臺共に材を現代社會に取るとはいふものの、日に〳〵公衆の興味より遠ざかり行く賤妓蕩子の類を寫すもの多かりしに、今や躍進一番、世人一般に痛切に感じ來れる社會の動搖、新舊思想の衝突に基く家庭の波

瀾等に向つて、觀察の眼を向け、女子の教育盛になりて女學生は新たに社會の一勢力となれば、これもまた自ら作中に入ること多し。また社會主義の行はるるに伴ひて、その思想を含めたる作品の現はれたるが如きも、見逃すべからざる現象なりとす。

歌壇の形勢

文學はなほ種々の方面に於て進歩あり、短歌も同じ風潮に乘じて清新の風を生み、新體詩の如きも二十七八年の交既に優麗典雅の古調を借りて、誦すべきものなきにあらざりしが、その内容に至つては朦朧體の名に背かず、未だ社會の期待を充す能はざりしに、三十年を過ぎては、西歐の詩風に刺戟せられて、形式よりもまづ内容の充實を先とし、或は象徴主義、或は自然主義を標榜して、青年が愛誦の的となる、たゞ明らさまにいへば舊風廢れて新風未だ確立せず、その前途なほ遼遠なるべし。俳句は、子規一たびその旗幟を鮮明にしてより、隱然として一方の勢力たりしが、その人無限の恨を懷いて逝きしより、形勢はなはだ振はず、隨從の士はた漸く倦怠の色あり。子規がその晩年の事業として力を盡くしゝ萬葉調の短歌も寫生文も、將來如何ばかりの發展を見るべきか、疑な

きを得ず。

劇界の形勢

劇壇は、三十六七年のころ、老練なる名優多く世を謝して、その後を承くべきもの未だ現はれず、伎藝の妙味を以て脚本の缺陷を補ふことも難くなりて、舊派の沈滯殊に甚し。新派はこれに反して漸く練磨の功を積み舊派と對峙するの勢にあれども、こゝにもまた脚本缺乏の歎あり。固より新舊兩派ともに少數熱心の作家が或は創作或は飜譯飜案を試みて脚本の供給に勵むあるも、梨園の情實は時に新人の手腕を自由に揮はしめざることあり。かゝる間にありて逍遙の舊作の始めて舞臺にかけられたるは注目すべし。逍遙はなほ樂劇新曲浦島を作り、これと同時に新樂劇論を著はして、今後わが國に行はるべき劇は振事を主とする樂劇ならざるべからざるを主張せり。その所說の勢力のよく那邊に及ぶべきかは暫く將來を待つべしと雖も、とにかくに逍遙が常に時勢の先頭に立ち、文藝のあらゆる方面を通じてその改善に腐心し、老の至るを知らざるの概あるは、明治文壇の異數にして、また功勞第一と稱すべし。

最近の小說界

小說の發展に至りては文學の何れの方面よりも際だちて目覺しきものあり、

ひとりわが國のみならず小說が世界の文壇を通ずる現下の流行物たるは今更めて言ふまでもなきことにして、勢ひ此の如くなれば一時或は新體詩或は俳句等に聲名を馳せたるものの轉じてこの方面に向へるも往々あり。小說作家中にありて嶄然傑出せるものは夏目漱石と國木田獨步となるべし。二人の作風を比較するに彼此各、特色あり、漱石は英文學の造詣極めて深く、また俳句に堪能なり、その小說に指を染めしは中年以後にして、初は專ら滑稽諷刺を喜びたりしが、今や漸く嚴肅の境地に達して、一作は一作よりその面目を新たにせんとする苦心の痕歷然たり。しかもその特色は冲澹洒脫なる俳趣禪味と精到緻密なる英文學の風尙とが兩々相扶けて、その筆致を淸新ならしむる所に存し、偶、或る觀念を捕へ來つてこれを作中の人物に具象化せんとし、または心理描寫に迂餘曲折の妙を盡くさんとして、聊か說明の煩瑣に趨る弊なきにあらず。獨步の作は殆ざすべて短篇にして、簡々しき說明は却つて感情の流露を妨ぐとなし、故らにこれを避けて、驀地に人生の眞相を衝かんとす。その簡短直截の文は漱石が辭句を烹鍊すると正反對の極にあり。蓋し獨步の小說は現代

の思想に觸れつゝ露骨に人間の生活を描きて、最も明快なる社會の縮圖を提供し、讀者をして的確にわが世の祕密を掴み得たるの感あらしめんとするものなり。この人一たび文壇に名を馳せてより、小說家の渠が輩に倣ふもの多く、現代文壇の流行はそのいはゆる自然主義に止めたり。

この文壇の事情は、說き來つて日露戰爭の後にまで及べるものなり。三十七八年の戰役はわが國未曾有の大戰にして、敵國とせし露西亞が歐洲の大國なりしだけ、それだけわが收めたる戰勝もめざましく、國民自覺の念これより一層强きを加ふると共に、列國環視の眼は益〻睜らる。從來かれらはわが島帝國を極東の一小國として、動もすれば侮慢の氣色ありしに、戰後の今日に至りては形勢一變、或る最近の英國版百科辭書は列强の條下に日本の名を擧げて千九百六年を以てこれに伍すといへり。かゝれば日本國民の飛躍は刻下世界の大問題となり、學者、政治家等種々の方面より觀察を下して、歷史上の奇蹟を成就せるわが國民の眞相を闡明せんとす。或は武士道を以てこの國民が飛躍の根柢と解するものあり、或は西洋の個人主義に對して家族主義を立つるを以て武俠の眞原因と信ずるものあり。とにかく東西兩洋の關係がこの戰役の後益〻緊密の度を加へ來れるは爭ふべからざる事實にして、將來兩洋の文明は互にその長所を失ふことなくして融合せらるべきか、はた此の如きは一箇の空想に止まりて永遠に相容るべからざるものなるか、これらの問題を解決すべき使命を荷へるものはやがて世界最舊文明國の一にしてまた世界最新文明國の一たるわが日本の國民を措きて他に求むべくもあらず、卽ちわれら日本人は自ら奮つてこの使命を果さんが爲に、あらゆる古今東西の文化を蒐めて打つて一丸とし、これを悠久にまた無限大に向上進步せしめんとするものなり。文藝發展の徑路もこの國運と伴ひて年と共に新に年と共に旺なるものあるべし、また多望なるかな。

國民の使命

國文學史講話 終

索引

ア

青表紙 一九七
青標紙 三七六
青本 三六八、三七〇、三七二
赤染衛門 一三七
縣居 眞淵、賀茂を見よ
赤人、山部 五八、六三、六七、七五、一一七
赤本 三七一
赤良、四方 三七三
顯季、藤原 一九六
顯輔、藤原 一九七、一九六
顯時、越後守 一七七
秋成、上田 三六四、三六八
朝比奈巡島記 三九九
吾妻鏡 一七三、一九一
東鑑、荷田 三一、三五、三四七
篤胤、平田 四〇四
天名地鏡（アナイチ） 一〇五
阿佛尼 二〇三
綾足、建部 三六八、三六九
有衡、藤原 九六
在滿、荷田 三五三、三六八
鴉鷺合戰物語 二四二
閑齋、山崎 二六七、二六八

イ

家隆、藤原 一八八、一九一、一九二、一九四
家康、德川 三九九、二六二
異學の禁 三七五
十六夜日記 二〇三
和泉式部 二一七、二二〇、二二一
和泉式部日記 二二三
出雲、竹田 二四三、二六九
伊勢物語 一〇九、二一〇、二二一、二二〇
伊曾保物語 二九二
一條天皇 二二五
一代男 三二九、三三〇、三三一
一代女 三三〇
一の谷嫩軍記 二五〇
一葉、樋口 四二九
一休 二四七
一休噺 二九二
一九、十返舍 三九五
田舍源氏 偐紫田舍源氏を見よ
狗張子 二九一
今鏡 一三三
妹背鏡 四二七
彌世繼 三二八
色懺悔 四二八
石清水物語 二〇八、二一〇、二一一
因果物語 二三〇
隆元 二九五

ウ

浮雲 四二七
浮世草紙 三一七、三二八、三八四

浮世床　三九六
浮世風呂　三九六
雨月物語　三六四
宇治拾遺物語　三〇九、三一〇
薄雪物語　二九一
歌合　二二一、二八〇
うたかたの記　四二九
雨中吟　二〇六
宇津保物語　二三二、二三八
宇萬伎、加藤　三六八
恨之助草子　二九一

エ

詠歌大概　一九八
榮華物語　一五二
被賽、狩谷　四〇一
惠心僧都　二二六
蝦夷志　三七七
益軒、貝原　三〇〇
江戸繁昌記　三七七
江戸名所記　二九〇
枝直、加藤　三五三

絵本太閤記　三七六
延喜式　三九
艶詞　二九一

オ

大堰川行幸和歌序　二九
大鏡　一五二
櫻痴、福地　四三一
鷗外、森　四八、四九
應仁記　三二五、三四二
王法論　四二〇
近江聖人　藤樹、中江を見よ
お國、出雲　二九三
憶良、山上　五八、六三、七〇、七五
落窪物語　二二三、二二八
お通、小野　三三三
御伽草子　二二六、二八〇
御伽婢子（オトギバウコ）　二九二
鬼貫、上島　三七七
折り焚く柴の記　二九〇
女文字　假名を見よ

カ

海音、紀　三四二
開卷驚奇俠客傳　三九九
歌學　二二六、二八、二五八
學問のすゝめ　四一八
景樹、香川　三七九、三八三
可笑記　二九〇
佳人之奇遇　四二二
風につれなき物語　二〇八、二一一
片歌　三六六
氣質物（カタギモノ）　三四二
學海、依田　四三二
家道訓　三〇〇
假名　一〇六
金澤文庫　一七七
假名聖教　二二三
假名草紙　三八四
假名文　二二六、二二
兼良、一條　二八二
歌舞鼓　二九三、三三九
鎌倉右大臣　實朝、源を見よ

鎌倉大雙紙　二二五、二四二、二九一
我樂多文庫　四二八
家隆　イエタカを見よ
歌論　二二六、二八、一九七
河内本　一九七

キ

喜雲、中川　二九一
九經　九七
鳩溪、平賀　三六六、三六八、三六九
救濟　二二六
其角、榎本　三二一、三三九
季吟、北村　二八六、三〇一
鬼外、福内　鳩溪、平賀を見よ
義經記　二四二
喜三二、朋誠堂　三八四
其磧、江島屋　三四二
喜撰　一〇四、一一六
喜撰式　一一六
紀傳道　九五
昨日は今日の物語　二九二
黄表紙　青本を見よ
狂歌　三七三
錦花、泉　四三四
狂訓亭　春水、爲永を見よ
狂言　一六九、二五五
幾孝　二四四
京極家　二〇三、二〇五、二〇六、二〇七、二二四
曉臺、暮雨庵　三五八
京傳、山東　三五六、三七七、三八八、三八四、三八八
京童　二九一
玉山、岡田　九七
曲亭　馬琴、曲亭を見よ
玉葉和歌集　二二六
清輔、藤原　二五九、二九六
魚鳥平家　二四二
清次　觀阿彌を見よ
清水物語　二九〇
桐一葉　四三二
金々先生榮華夢　三七〇
公經、西園寺　一九五
公任、藤原　二七、一二八
金平淨瑠璃　三七〇
金平節　二九三
金葉集　一五七、一八七、二二六

ク

空海　九五、九八、一〇六
草村、饗庭　四二九
草雙紙　三七〇、三八四
癇癖談（クセモノガタリ）　三六五
宮内卿　一九一
黑主、大伴　一〇四
黑本　三七〇
懷風藻　五八、六一
花月草紙　一三三、三七五
活歴物　四二一
花柳新話　四二二
觀阿彌　二四八
冠山、岡島　三六二
冠辭考　三五五
勸懲主義　三八四、三八九
冠服考　三〇七

ケ

慶應義塾　四一七

經國集　九九
經國美談　四三
契沖　三三、三四、三四七
玄慈　一七
護國　徂徠、荻生を見よ
源空　一六二、二八三
兼好　二三〇
兼山、野中　二八五
源氏奥入　一九八、二〇九
源氏供養　二二
玄旨法印　幽齋、細川を見よ
源氏物語　一三二、一三三、一四三、一四七、一六〇、一九七、二二一、二五一、二三〇、二六二、二九七
源氏物語湖月抄　二八六
顯昭　一五九、一九六
源氏論義　二〇九
顯註密勘　一九七
玄同放言　二七八
源内、平賀　鳩溪、平賀を見よ
言文一致　四二六
源平盛衰記　二二三、二五一、二九一
硯友社　四二八
元隣、山岡　二九〇

コ

合卷　三九〇
江湖新聞　四一六
好色本　三二九
紅葉、尾崎　四二八、四三〇、四三四
幸若舞　二九五、二九三
古學　復古學を見よ
古今集序　一二六、一二九
古今集正義　三八〇
古今傳授　二四四、二五六、二六三
古今和歌集　一一〇、一一一、一八八、一九七、二八〇
古今著聞集　二〇九
國學　三一四、三五〇、三五一、三五三、四〇〇、四〇一
國史の選修　五七
國姓爺合戰　三三四
國民之友　四二六、四二九
苔の衣　二〇八、二一一
五山　二六三、二六二
五山、菊池　四〇一
五十音圖　一〇七
五重塔　四二八
古事記　三九、四四、五〇、五八、一〇六
古事記傳　四〇二
小式部　一三〇
古史通　三〇七
越部禪尼　一九五
後崇光院　二四一
後撰和歌集　一二一
滑稽本　三九五
骨董集　三七八
後鳥羽上皇　一八五、一八九、一九一
古風の俳諧　二八八、二八九
古文辭學　三〇四
小町、小野　二〇四
語孟字義　三〇四
惟足、吉川　二六八
伊行、世尊寺　一九八、二〇九
穀(コヲシ)、井上　四二九
金色夜叉　四三五
今昔物語　一三三、二〇九

サ

西鶴、井原　一四一、一三四、一三八、一三六、一三七、一四七、一七一、一四〇
西行　一六一、一六二、一六四、一八八、一九一、二一〇、二一五、二二八
細君　四二九
西國立志編　四一八
最澄　九五
栄覽異言　二〇七
嵯峨天皇　九九
策傳、安樂庵　二九二
狹衣　一四一
定家、藤原　一八六、一八八、一八九、一九一、一九二、一九四、一九六、一九七、二〇一、二〇六、二一九
定信、松平　三七三、三七四
貞世、今川　二四三
貫氏、常盤井　一九五
實方、藤原　一二七
實隆、三條西　二四五
實朝、源　一九五
小夜衣　二九一
三教指歸　九九
三五記　二〇六
三代男　三三一
山東庵　京傳、山東を見よ
三馬、式亭　三九五
散木奇歌集　一五七
山陽、頼　二〇七、四〇一

シ

詩合　二〇七
周阿　九九
拾遺集　二九二
十七條憲法　一四一
十二段草子　一九六、一九七、二〇二、二〇六、二一九
慈圓　三七三、三七四
史海　二四三
仕方噺　二四三
櫛草紙　一九五
子規、正岡　一二七
色音論　二四五
式子內親王　一九五
詞花集　二九一
史劇　九九
繁野話　二〇六
重賴、松江　三三一
自笑、八文字屋　三四一
自然主義　四四〇
時代物　三三三
順、源　二一七、四〇一
慈鎭　慈圓を見よ
十訓抄　二一
十訓、益軒の　二一
詩佛、大窪　二二六
紫明抄　二二五
寂蓮　三九
寫實小說　三三三
寫生文　一九一、一九二
車輿考　四三一
酒落本　二九二
朱子學　四二九
逍遙、林　四三一、四三七
順庵、木下　二九〇
純一郎、織田　一九一
俊慈　一五七、一五九、一八七
俊寛僧都島物語　四三一
春齋、林　三九三
俊芿　二八八

舜水、朱　一〇〇、一九五
春水、爲永　三七七、三九七、四三〇
俊成　トシナリを見よ
春齋、太宰　三〇五
順德天皇　一九一
襄、新島　四一九
貞永式目　一七三
常緣、東　ツネヨリを見よ
彰考館　三〇九
正三、鈴木　二九〇
正三位　二一〇
尙齒會　九八
小說神髓　四二五、四四八
小說讀法　三六三
松染情史　三九二
正徹　二四三、二四七
聖德太子　三六、三九、五六、五七、五九、九九
肖柏、牡丹花　二四五
正風　三一八
昌平坂學問所　三七四
正平版論語　二八三
遣遙、坪內　四二四、四二九、四三一、四三八
性慮集　九九
淨瑠璃　二六一、二九二、三一七、三三三、三三九、三四一
初學訓　三〇〇
蜀山、太田　赤良、四方を見よ　四二五、四二七、四三八
書生氣質　三六八
白雄、春秋庵
新薄雪物語　一九一
新演劇　四三一
心學　二七一
新學異見　三八〇
新樂劇論　四二八
新曲浦島　四三八
人權新說　四一〇
神皇正統記　三二七、三二八
新古今集　一八九、一八七
新後撰集　二〇四
仁齋、伊藤　三〇一、三〇四、三〇六、三〇七
新撰菟玖波集　二四五
新體詩　三〇七
新勅撰集　四二七
新著百種　一八九、一〇一
神道五部書　四一八
親鸞　二一一、二一三
心理小說　四三三
神靈矢口渡　三六九
神話　四二
水源抄　一九八、二〇九
季經、藤原　一九六
世阿彌　二四七
清河、安　三六三
慳窩、藤原　三六七、三八四
靜軒、寺門　三九二
醒睡笑　二四一
政治小說　二一九、一九九、二一〇
清少納言　三〇七
西洋紀聞　四一八
西洋事情　四二五
西洋膝栗毛　四一八
西洋品行論　三七四
精里、古賀　二一〇

世界國づくし　四一七
說經祭文　二九三
雪中梅　四二三
世話物　三三三
全交、芝　三八四
千載集　一八七、二〇二
選擇集　二八三
撰集抄　二一〇、二一二
宣命　五八、一〇六
川柳、柄井　三七三

ソ

草庵集　三二五
宗因、西山　二八八、三二八
宗鑑、山崎　二六〇
宗祇　二四四、二四五、二六〇
壯士歌　四一九
壯士芝居　四三二
湫石、夏目　四三九
宗長、柴屋庵　二四五
雙蝶記　三八七
巢林子　門左衛門、近松を見よ
草廬、龍　三六三
曾我會稽山　三三四
曾我物語　二二一
續後撰集　二〇一、二〇四
續拾遺集　二〇四
素行、山鹿　二〇三
素寂　二〇九
曾丹　好忠、曾禰を見よ
曾根崎心中　三三四、三三六
蘇峰、德富　四二六
蘇門、服　三六三
徂徠、荻生　二〇一、二〇四、二〇七、二二七
曾呂利狂歌噺　二九二

タ

大學解　二〇四
大學定本　二〇四
太祇、炭　三六〇
太閤記　二二五
大日本史　二一〇
太平記　二二五、二二一、二二九
太平記讀　一九二
隆國、源　二〇九
誰が身の上　二九〇
築、小野　二二一
竹取物語　九九、一〇一
太政官日誌　二〇一、二〇二
多情多恨　二〇四
忠度、薩摩守　二〇六
忠岑、壬生　二二九
辰猪、馬場　二一一
種彥、柳亭　二二一
旅人、大伴　二二七、二九七、二三〇
蘇峰、德富　二六八、二六二、二七〇、二七二
爲家、二條　三六三
爲氏、二條　二〇一、二〇四、二〇七、二二七
爲兼、京極　二九二
爲相、冷泉　二〇二
爲敦、京極　二〇四、二〇五
爲世、二條　二〇四
檀林風　二〇四

チ

中外新聞　二六三
中庸解　二〇四

中庸發義　三〇四
千蔭、加藤　三五三、三七二、三七九、四〇一
親房、北島　三三七
近松門左衛門、近松を見よ
竹齋物語　二九〇
、山、外山　四二三
椿說弓張月　三九八
椿葉記　二四一
長嘯、木下　二八五
長明、鴨　一九一、二一〇
長流　ナガルを見よ
樗牛、高山　四三五
樗良、無爲庵　三五八

ツ

通俗水滸傳　三六三
菟玖波集　二四五
土御門天皇　一九一
綱吉、德川　二九六
經信、源　一五五
常縁、東　二四四
貫之、紀　二一、二二、二五—三二、三八〇

テ

定家　サダイエを見よ
貞室、安原　四二九
庭鐘、鄧賀　三〇四
貞德、松永　二八
貞柳、油煙齋　三五五
徹書記　正徹を見よ
鐵腸、末廣　三〇七
天外、小杉　四三
天壽國曼荼羅　三五八
天智天皇　四二〇
天の網島　三〇七
天賦人權論　三三四
天武天皇　四二〇
天明調　一五五

ト

東雅　三〇七
東涯、伊藤　三〇三
東海散史　四三
東海道中膝栗毛　三九五、四一五
東海道名所記　二九〇
同志社　四一九
童子問　三〇四
藤樹、中江　二八五
同人社　四一八
當世書生氣質　書生氣質を見よ
同文通考　三〇七
土佐日記　二一九
土佐日記創見　三八〇
俊成、藤原　一二〇、一八六、一九五、一九六、二〇二
得庵、鳥尾　四二〇
毛　四二〇
讀史餘論　三〇七
篤介、中江　三三四
獨歩、國木田　四二〇
殿居鑑　一五五
知家、二條　四三九
友則、紀　三五六
とりかへばや物語　一九七
頓阿　二一

ナ

長歌　四一、二八、三五六
長町女腹切　三三六
仲麿、安倍　五八
長流、下河邊　三二
梨壺五人　二二
梨本集　三二三
業平、在原　一〇二、一〇四、一〇九、一一〇、一一三、一一五
南海、祇　三五七
南郭、服　三〇五、三五七、三六三
南梨、須藤　四二二
南總里見八犬傳　三九九
南島志　三〇七

ニ

新學　三五九
錦木　二九一
西山物語　三六六、三六九
二洲、尾藤　三七四
二條家　一九六、二〇二—二〇七、二二四、二四二、二四五
彦紫田舍源氏　三七七、三九七
二代男　三二
日蓮　二二三
二人比丘尼　二九〇
日本永代藏　三三九
日本外史　五八
日本書紀　三二
日本人　二二
日本派　三二三
日本文學全書　三五七
如儡子　三〇七
人情本　三九七

ネ

根無草　三〇七

ノ

能因　三五九
能樂　二九一
信長記　三六六、三六九
延佳、度會　三七四
祝詞　三五五
祝詞考　三九七、四二、四八、五一、一〇六
宣長、本居　一九〇、二六二、四〇一

八

俳諧　一七四、二二〇、二六六
俳諧歌　三七八
梅巖、石田　二七一
馬琴、曲亭　一四二、一二〇、一二六、一八四、二八五、二八六、二八七、二九一、二九四、二九五、四二〇
白石、新井　三〇六
白日、大西　四二五
芭蕉、松尾　二四五、二八、二三二、二四七、二九、四二一
八文字屋本　二四二、二六二、二八四
白駒、岡　三六三
花園天皇　二〇四
晰の本　二九二
英草紙　三六二、三六三、三六四
濱松中納言　一四一
春雨物語　三六五
春町、戀川　三七〇、三八四
春海、村田　三七二、三七九、四〇一
春村、黑川　三七八、四〇一
藩翰譜　三〇八

蕃山、熊澤 二八五
牛二、近松 三六九

ヒ

悲慘小說 四三四
秀句冊（ヒツクサ） 三六三
秀能、藤原 一九一
人麿、柿本 五八、六三、六八、七二、七五、一二四、一二六、一二七
一目玉鉾 三三八
日文（ヒブミ） 一〇五
美妙、山田 四二八、四二九
百萬塔陀羅尼 二八三
平假名盛衰記 二五〇
弘之、加藤 四二〇

フ

風雅和歌集 二〇四
風葉、小栗 四三六
風流志道軒傳 三六七
風流佛 四二八
福內鬼外 鳩溪、平賀を見よ
扶桑拾葉集 三三一
蕪村、與謝 三五八、四三一
二葉亭、長谷川 四二七
復古學 三〇一
武道傳來記 三三九
風土記 五八
文鏡祕府論 九九
文華秀麗集 九九
文武訓 三〇〇

ヘ

平家物語 一六八、二二三、二三一、二三三、二三六、二五一、二五四、二五七
平治物語 二二三
遍昭 一〇三
辨道 三〇四
辨名 三〇四

ホ

保元物語 二二三
鳳岡、林 三〇六
鵬齋、龜田 四〇一
寶治百首 二〇三
方丈記 二二〇、二二三
法然 源空を見よ
寶物集 二二〇、二二三
保已一、塙 三七四
法華經義疏 五九
北海、江村 三六三
北海、片山 三六三
發句 二六〇
發心集 二二〇
秀眞（ホツマ） 一〇五
本朝軍器考 三〇七
本朝水滸傳 三六六、三六九
本朝醉菩提 三八七
本朝通鑑 三〇九

マ

舞の本 二五八、二五九
舞姫 四二九
眞顏、北川 三七八
牧の方 四三二
眞備、吉備 五八、一〇六
枕草紙 一三三

枕草紙春曙抄 二八六
正明、石原 一九〇
正直、中村 四一八
增鏡 一三三、二二八、二三九
松浦宮物語 二二〇
眞淵、賀茂 三五〇、三五二、三六八、三七九、四〇一、四〇三
滿之、清澤 四二五
萬葉集 五〇、五八、五九、七七、八六、一〇六、一一三、一一三、三二六、三三一、三五五、三五六
萬葉集代匠記 三一三

ミ

御傘 二八八
水鏡 一五三
通勝、中院 二八六
道眞、菅原 九六、九九、一〇一、一〇三
道長、藤原 一二五、一二八
光圀、德川 三〇九
躬恒、凡河內 一一一、一一六
光廣、烏丸 二八六
光行、源 一九七、二〇九
水戶學 三一〇、四〇五
都の花 四一八
未來記 二〇六
民約論 四二〇

ム

昔語稻妻表紙 三八七
夢幻劇 三四三
胸算用 三三九
紫式部 一三七、一三三、一四〇、二一一
紫式部日記 一三一

メ

明月記 一九七

モ

默阿彌、河竹 四一五
茂睡、戶田 三一三
元淸 世阿彌を見よ
基俊、藤原 一九九
守武、荒木田 二六〇
守部、橘 三七八
門左衞門、近松 一四一、三〇九、三二四、三三二、三三五、三三六、三四七、三六九、四三〇
文章博士 九六

ヤ

家持、大伴 五八、七一
役者評判記 三四二
康秀、文屋 一〇四
大和俗訓 三〇〇
日本武尊 五三、三三五
大和錦 四二八
大和物語 一二三、一四七、二五一

ユ

幽齋、細川 二四五、二六三、二八五
雄略天皇 三六、五三
諭吉、福澤 四一七
行平、在原 一〇三、一〇四

ヨ

謠曲 一六九、二四〇、二四六、二六二、二九三、三一七
暘谷、高 三六三
陽明學 二八五

好忠、曾禰　一三〇、一三〇
良經、後京極　一九一、一九一
吉野拾遺　三八
良基、二條　三五、三六、三四五
吉原五十四君　三九
讀本　三五七、三六六、三六四
賴政、源　三九
萬屋助六心中　三六
夜半の寢覺　二一〇

ラ

羅山、林　三六七、三八四
閑更、南無庵　三五八

リ

龍溪、矢野　四三
立圃、野々口　二八八
柳北、成島　四一六
柳浪、廣津　四二八、四三四
里恭、柳　三五七
栗山、柴野　三七四
了意、淺井　二九〇、二九二

凌雲集　九
了俊　貞世、今川を見よ　四三六、
梁川、綱島　三八
蓼太、雪中庵　四三九
綠雨、齋藤　四三〇
綠叢談

レ

禮儀類典　二一〇
冷泉家　三〇三、三〇七
歷史小說　三九一、四三一
連歌　一七四、三三五、三八

ロ

蘆庵、小澤　三六六、三八三、四〇一
六條家　一五九、一九六、一九七
六歌仙　一〇四、一一七
六百番歌合　一九六
露伴、幸田　四三八、四三〇
魯文、假名垣　四一五
論語古義　三〇四
論語徵　三〇四

ワ

和歌四式　一二六
和歌傳授　三四五
和歌二聖　一二六
和漢朗詠集　一三八
和字正濫抄　三三
和文　假名文に同じ

大正十一年一月十日印刷
大正十一年一月十五日發行
大正十五年八月五日改版第一刷發行

國文學史講話
定價二圓八十錢
（大森製本）

著者　藤岡作太郎

發行者　東京市神田區南神保町十六番地　岩波茂雄

印刷者　東京市神田區西小川町二丁目五番地　津村福章

株式會社一誠印刷所

發行所　東京市神田區南神保町十六番地　岩波書店
電話四谷五八七〇番
振替東京二六二四〇番

版權所有

コ-3506
い 21

國文學全史（平安朝編）藤岡作太郎著 定價四圓五十錢 送料書留廿七錢
神代史の研究 津田左右吉著 定價三圓五十錢 送料書留廿七錢
古事記及び日本書紀の研究 津田左右吉著 定價四圓 送料書留廿七錢
白鳥博士還暦記念 東洋史論叢 池内宏編 定價四圓八十錢 送料書留卅六錢
日本古代文化 和辻哲郎著 定價二圓五十錢 送料書留十八錢
古寺巡禮 和辻哲郎著 定價二圓五十錢 送料書留十八錢
冬の日抄 幸田露伴著 定價二圓三十錢 送料書留十八錢
萬葉集の鑑賞及び其批評 島木赤彦著 定價一圓 送料書留十八錢
芭蕉七部集定本 勝峰晋風著 定價二圓八十錢 送料書留廿七錢
日本精神史研究 和辻哲郎著 近刊
岩波書店

910.2
F661

終